

高度経済成長期を画期とした 西中国山地の植生景観変化と その背景について

広島県北西部八幡高原と山口県秋吉台の場合

Vegetation Landscape Changes and Their Backgrounds in the West Chugoku Mountains Region since the Rapid Economic Growth Period as the Turning Point : Cases of Yawata Highland, Northwest Hiroshima Prefecture and Akiyoshidai, Yamaguchi Prefecture

小椋純一

OGURA Jun'ichi

はじめに

①八幡高原における植生景観変化とその背景

②秋吉台における植生景観変化とその背景

むすび

【論文要旨】

森林や草原の景観はふつう1～2年で大きく変わることはないが、数十年の単位で見ると、樹木の成長や枯死、あるいは草原の放置による森林化などにより、しばしば大きく変化する。本稿では、高度経済成長期を画期とする植生景観変化とその背景について、中国山地西部の2つの地域の例について考えてみた。その具体的な地域として取り上げたのは、広島県北西部の北広島町の八幡高原と山口県のやや西部に位置する秋吉台である。その2つの地域について、文献類や写真、また古老への聞き取りなどをもとに考察した。

その結果、八幡高原では、たとえば、今はスキー場などの一部を除き、草原はわずかしは見られないが、高度経済成長期の前までは、牛馬の放牧などのためなどに存在した草原が少なからず見られた。その草原の大部分は森林に変わり、また、高度経済成長期の前の森林には大きな木が少なかったが、燃料の変化などにより、森林の樹木は高木化した。なお、その地の草原は、高度経済成長期の直前の頃よりも少し遡る昭和初頭の頃、あるいは大正期頃まではさらに広く、その面積は森林を上回るほどであった。その変化の背景には、そこで飼育されていた馬の減少もあったが、別の背景として、大正の終り頃から製炭が盛んになり、山林の主な運用方法が旧来の牛馬の飼育や肥料用などのための柴草採取から、炭の原木確保のための立木育成へと変わったことがあった。

一方、秋吉台には、今も草原が広く見られるが、それはそこが国定公園などに指定されている所で、草原の景観を守ることが観光地としての価値を維持するためにも重要であるためである。しかし、その秋吉台の草原も、高度経済成長期の前と比べると、草原面積は少し減少している。また、草原やその周辺の山林への人の関わり方の大きな変化により、植物種の変化など、その草原には大きな質的变化が見られ、また草原を取り巻く森林も高木化が進むなど大きく変化してきている。

【キーワード】 植生景観変化、高度経済成長期、中国山地西部、八幡高原、秋吉台

はじめに

森林や草原の景観はふつう1～2年で大きく変わることはないが、数十年の単位で見ると、樹木の成長や枯死、あるいは草原の放置による森林化などにより、しばしば大きく変化する。日本の森林や草原などの植生景観の変化は、明治維新以降、ここ約150年間において概してかなり大きなものであったと考えられる。それについては、明治以降作成されてきた地形図や今も残る古写真などからもわかるところがある。地形図をもとにした景観変化についての研究や調査は広く行われてきており、全国規模でのそうした研究の集大成ともいえる書籍が出版されたりもしている⁽¹⁾。また、古写真をもとにした研究、調査なども少なくない。

ただ、過去の地形図から読み取ることができる植生景観には限界がある。たとえば「針葉樹林」⁽²⁾として記された場所の樹種やその木々の大小や樹木密度を地形図から知ることは難しい。また、近年では写真は多くの人々が容易に数多く撮影することができるが、かつてはそうではなかったため、人々が多く訪れた名所や行楽地などの一部を除き、古写真から植生景観の変遷を明らかにすることは容易でないことが多い⁽³⁾。そうしたこともあり、大まかな景観の変化については認識されていたとしても、ある地域や場所にかつて見られた森林や草原などの植生景観の実態、あるいは、たとえば草原がどのような理由で、どのように森林に変わっていったのかなどということを知ることは難しい⁽⁴⁾。ことが少なくない。

そのため、日本のかつての植生景観の歴史については、十分明らかにされていない部分が多く、またその概要についてさえも一般にはまだ広く認識されていないのが実情である。たとえば、明治以降、日本では草原が大幅に減少する一方で森林は大幅に増えたにもかかわらず、日本の森林は減少してきているとの認識を持つ人がまだ少なくない⁽⁵⁾。また、古い時代を扱った映画やテレビドラマなどでは、植生景観についての時代考証が行われていないと思われるものが少なくない。それは、かつてのような植生景観のロケ地が少ないということだけではなく、映画やテレビドラマなどの制作者の植生景観に対する認識不足があるように思われる。森林や草原の草木が、かつてはきわめて重要な資源であり、人々はそれに大きく依存して生きてきたという認識はあっても、今の時代の植生に対する薄い関心から、そうした暮らしの中でどのような植生景観が作られていたのかということまでは考えが及ばないのであろう。あるいは、これまで地方の自治体などが作成してきた数多くの地誌などでも、森林利用などの歴史などについては触れても、植生景観の変遷について詳しく記したものは少ない⁽⁶⁾。

このような状況の中で、筆者はさまざまな資料などをもとに、植生景観の歴史について研究を進めてきた⁽⁷⁾。本稿では、西中国山地における高度経済成長期を画期とした植生景観変化について考えるが、筆者は数年前に同様なテーマで、岡山県北部の中国山地、京都市郊外、三重県の離島の3地域について考えたことがある⁽⁸⁾。その結果、いずれの地域でも高度経済成長期を契機として大きな植生景観変化が見られたが、それぞれの地域における植生景観の変化やその変化の背景など、地域ごとに大きく異なるものであった。

本稿では、先の考察地域とは異なる事例として、中国山地西部の2つの地域の例について考えて

みたい。その具体的な地域として取り上げるのは、広島県北西部の八幡高原と山口県のやや西部に位置する秋吉台である（図1）。八幡高原は、先に考察した岡山県北部中国山地の例と似て、かつて広く見られた草原が近年では大幅に減少しているところである。一方、秋吉台は今も草原が広く見られるところである。その現況の異なる2つの地域における高度経済成長期前から近年にかけての植生景観の変化とその背景について、文献類や古老への聞き取りなどをもとに考えてみたい。



図1 2つの調査地域

①……………八幡高原における植生景観変化とその背景

(1) 八幡高原について

八幡高原は広島県の北西部の西中国山地脊梁部、島根県に接したところに位置している。そこは60年あまり前まで八幡村があったところであり、本稿では、その村があった地区を八幡高原と称することにする。その地は、冬期は中国山地の中でもとくに積雪が多いところであるが、古くから多くの人々が暮らしてきたところである。

八幡高原は、現在は山県郡北広島町の一部であるが、平成17（2005）年2月1日の千代田町などの合併までは山県郡芸北町の一部であった。また、昭和31（1956）年9月30日の雄鹿原村などの合併までは、明治22（1889）年の市町村制施行以降、八幡村として存在していた。その八幡村は、遅くとも江戸初期より続いた東八幡村と西八幡村が合併してできたものであった。⁽⁹⁾

当地は、江戸初期から明治初期までは、砂鉄の運搬や製炭なども含む鉄山関係の産業も盛んであったが、その後は米作、畜産、林業が主な産業となり、人口が最も多かった昭和23（1948）年には戸数312戸、人口1,510人を数えた。⁽¹⁰⁾しかし、その後は高度経済成長期を経て、人口は大きく減少して今日に至っている。

八幡高原のうち八幡盆地は、海拔約750～800mの山間盆地で、盆地底部には旧八幡村の集落や農地などが広がっている。一方、八幡高原の南部低地には樽床ダムがある。そのダムは、広島市を流れる太田川水系柴木川の最上流部に、高度経済成長期初期の昭和32（1957）年に完成した。そのダムができる前には、そこには樽床の集落があり、70戸余りの家があった。⁽¹¹⁾

(2) 八幡高原の植生景観の近況

八幡高原は、集落や農地やダム湖などを臥竜山（刈尾山）、掛頭山、高岳をはじめ、標高900m前後から1,200m余りの山々に囲まれている。現在、その山々の大部分はブナやミズナラなどからなる天然林、スギやヒノキなどの人工林、あるいはアカマツ林などの豊かな森林で覆われている。その近年における植生については、渡邊園子氏らによる詳しい研究結果がある。⁽¹²⁾

平成12(2000)年に撮影された空中写真をもとに詳しい植生図も作成されているその研究では、その地区は落葉広葉樹林が2,408haで56.6%を占め最も多く、ついでマツ林が15.4%、植林地7.5%、草地在5.4%などとされている。また、その研究では、各植生は当時次のようなものであったとされている。

まず、その地区の過半を占める落葉広葉樹林は、ブナ林、クリ-ミズナラ林、コナラ林等で、柴木川に沿った低地一帯をのぞき、低地から高地まで極めて広く分布している。そのうち、ブナ林は臥竜山上部に見られるところがあるが、それ以外のところのほとんどはコナラが優占する森林である。そのコナラを中心とした林の高木層には、コナラのほかにアカマツやクリなど、亜高木層にはリョウブ、コハウチワカエデ、サワシバなど、低木層にはアセビ、ミヤマガマズミ、コバノミツバツツジ、イヌツゲなどが見られる。

次に多くの面積を占めるマツ林は、主にアカマツを中心とした林で、標高750mから800m程度の比較的緩斜面に多く見られる。この地区におけるマツ林の分布の特徴として、落葉広葉樹林の中に小規模なものが点在するモザイク構造がしばしば見られる。そのようなモザイク構造は八幡高原全体で見られるが、樽床ダム(聖湖)の東側と西側などでとくに顕著に見られるところがある。また、千町原周辺部では、マツ林が草地周辺部に帯状に分布するところがあり、長者原など湿原の集水域で集中した分布が見られるところがある。

マツ林には高木や亜高木としてコナラが比較的多く含まれることも少なくない。コナラのほかにその高木層に含まれる樹種としてクリなど、また亜高木層に含まれる樹種としてカシワなどがある。その地におけるマツ林の低木層の樹種としては、コナラ、カシワ、ナツツバキ、ウワミズザクラ、コシアブラ、ヤマウルシ、ナナカマド、コハウチワカエデ、ノリウツギなどが見られ、林床にはササが見られることが多い。

一方、植林地は主にスギとヒノキの人工林である。そのうち、スギの植林地は居住地付近に小規模のものが多数見られる。また、カラマツの植林地もあり、数カ所にやや広い面積のものも見られるが、そのほとんどは植生図に図示できないほどの小面積のものである。なお、臥竜山の中腹には植林ではなく天然生と思われるスギの小さな林分が点在している。

また、この地区の5%あまりを占める草地には、草原、湿原、ササ原などを含む植生タイプが含まれ、千町原やこの地区のやや西方にあるスキー場に広く見られる。

以上のような平成12(2000)年の状況に対し、平成25(2013)年から平成27(2015)年にかけて、筆者はその地を3度訪ねる機会があり、その地の植生景観の近況を見ることができた。そのときにざっと見ることでできた範囲では、当地の植生景観は、渡邊氏らが調査した時点とはさほど大きく変化していないように思われた。

なお、八幡高原の最近の植生を実際に見て、とくに印象的なことの一つとして、その地区の比較的低位に元気なアカマツ林が多く見られることがあった。マツ林は、とくに高度経済成長期の頃以降、いわゆるマツクイムシによる被害などで大量かつ急速に枯死し、広範な日本の地域から既に消えてしまったり、あるいは大幅に減少したりしているところが多いが、八幡高原のあたりではマツ枯れは見かけられず、マツ林は概してたいへん元気な状態に見えた。それは、その地が中国地方でもかなり冷涼な気候のところであることや、冬期に降雪がかなり多いといった自然条件が関係して

いるものと思われる。

また、臥竜山上部にはブナ林も存在するが、そのブナの中には「あがりこ」と呼ばれる樹形のものが見られるのも印象的であった。ブナのその樹形は、かつて薪炭利用などのために伐採が繰り返されることによりできたもので、秋田県の鳥海山山麓での調査研究によると、「あがりこ」は雪上伐採が何度も繰り返された結果と考えられている⁽¹³⁾。

写真1～6は、平成25（2013）年に筆者が八幡高原を訪ねた際に撮影したもので、その地の植生の近況の一端を示すものである。



写真1 八幡高原の低地部に見られるアカマツ林



写真2 樽床ダムとその東方の森林

写真ではよくわからないが、ダムの背後に見える森林には、コナラなどの落葉広葉樹林とともにアカマツ林の部分も多く見られる



写真3 臥竜山中腹のミズナラ林



写真4 臥竜山上部のブナ林



写真5 「あがりこ」樹形のブナ（臥竜山）



写真6 八幡高原北部の山並み（掛頭山の北西約1.5km）
山の斜面には、落葉広葉樹林とともにスギの植林地が広く見られる

(3) 八幡高原の植生景観の変遷

八幡高原の山々は、今はその大部分が森林で覆われているが、その地域も筆者が先年考察した中国山地東部の場合などと同様、かつては山地に草原が多いところであった。その明治から大正期の状況については、『八幡村史』〔芸北町 1976〕⁽¹⁴⁾からもうかがい知ることができる。

それによると、たとえば明治初期の地租改正による丈量結果は、八幡村の前身であった東八幡村と西八幡村の宅地と畑を除く丈量地、約 1,100 町歩のうち、草山が約 6 割、薪山が約 4 割であった。また、明治 44 (1911) 年に八幡村内の大字と部落が所有していた山林をすべて八幡村の村有として整理したときの記録では、村有山林総面積約 1,100 町歩のうち、約 600 町歩が耕地の面積に応じて配当される草山とされている。そのことから、当時も、草山は村有山林の少なくとも過半を占めていたことになる。あるいは、大正 5 (1916) 年にまとめられた八幡村有林の施業案説明書では、全体で約 1,742 町歩のうち、立木地などの普通施業地が約 762 町歩であるのに対し、除地と区分されている柴草採取地と放牧地が合計約 977 町歩となっている⁽¹⁵⁾。柴草採取地も草原と見れば、村有山林の約 56% が草原だったということになる。民有山林の状況については不明とはいえ、『八幡村史』所収の「村有林分布図」から村有林は村の山林の過半を占めると見られること、また村有林には、後述のように、かつて広大な草原があった高嶽付近や聖山付近が含まれないことなどから、少なくとも大正初期までは、草原は八幡高原の山林のかなり大きな割合を占めていたものと考えられる。

一方、1950 年代以降の八幡高原の植生についてはいくつかの研究がある⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾。たとえば、堀川芳雄氏らによる 1950 年代の調査研究の一つによると、当時その地区のあたりにおける景観区分の地域構成比は、その大きいものから順に、落葉広葉樹林 (57.6%)、マツ林 (15.5%)、草原 (11.6%)、水田 (6.4%)、ササ原 (4.5%)、ヒノキ林 (2.4%)、畑地 (1.4%)、スギ林 (0.5%)・湿原 (0.5%)、カラマツ林 (0.1%) となっている⁽²⁰⁾。

そのうち、落葉広葉樹林は、刈尾山 (臥竜山) の上部などの一部にブナやミズナラを中心とした林も見られたが、大部分はコナラを中心とした林であった。コナラ林には、クリやアカマツやソヨゴなども見られた。マツ林は、主にアカマツを中心とした林⁽²¹⁾で、そこにはクリやコナラなども見られた。また、草原は種々の形態をとるものがあつたが、一般に原野と称されるもので、そこには採草地も含まれた。草原にはススキがしばしば多く見られ、そこにはトダシバやワラビやマツムシソウなども見られた。

なお、その調査研究では、植物種の違いとともに植生の高さの違いにより、草原とササ原が区別されているが、植生景観を区分する際にササ原を草原に含めることもある。ちなみに、かつて筆者が日本の草原の歴史を考えたときには、過去の林野統計資料などにササ原についての記載がないことが多いことなどにより、ササ原も草原に含めて考えた⁽²⁴⁾。

上記の 1950 年代の調査研究結果において、ササ原も草原に含めると、草原の割合は 16.1% となり、落葉広葉樹林に次いで大きな割合を占める景観区分となる。ただ、その調査研究報告が収められている『三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告』(広島県教育委員会 1959) には、「芸北地方 (三段峡及びその周辺) 植生の研究」と題する別の調査研究報告も収められており、それには八幡高原南部を含む植生図が付されている⁽²⁵⁾。その植生図では、八幡高原の北部は確認できないものの、八

幡高原南部の樽床付近については、草原が落葉広葉樹林などの森林に匹敵するほどにも広く見られる。ちなみに、先に記した1950年代の調査研究報告では、八幡高原の北部と南部それぞれの景観区分の数字も記されているが、それによると八幡高原の北部の方が南部よりも草原の占める割合が大きく、南部の樽床付近に草原がとくに多かったわけではない。

その植生図に草原が落葉広葉樹林に匹敵するほどにも広く見える理由としては、先に記した1950年代の調査研究が、広島県調製の米国陸軍空中写真による1/10,000地形図をもとにしているのに対し、その植生図は国の1/50,000地形図⁽²⁶⁾をベースにして作成されているためと考えられる。

八幡高原の植生景観変化については、高橋春成氏も同様に国の1/50,000地形図⁽²⁷⁾をもとに、かつての植生図を作成している⁽²⁸⁾。そこで「明治～昭和30年代頃の景観」として作成されている植生図にも、八幡高原南部の樽床付近などに広大な草原が見られ、その面積はやはり森林に匹敵するほどの広さである。1950年代の調査研究も同様であるが、国の地形図をもとにした植生図では、「荒地」を草原ととらえている。なお、高橋春成氏の植生図では、森林は“広葉樹林地”、“針・広混生林地”、“針葉樹林地”に分けられており、樽床付近の森林のほとんどは“広葉樹林地”と“針・広混生林地”である。樽床付近を広く見ると“広葉樹林地”と“針・広混生林地”の面積はさほど変わらないが、集落の近くでは“針・広混生林地”が見られるところが多い。

国の1/50,000地形図をベースにした植生図で草原の割合がずいぶん大きくなっている大きな理由として、それらの地形図が明治32(1899)年測図の地形図の修正版であったり、その応用修正版であったりするため、山地の植生までも十分修正されていないことが考えられる。たとえば、高橋論文中「明治～昭和30年代頃の景観」の図のもとになったと考えられる地形図(昭和10<1935>年7月30日発行)の測量年は昭和7(1932)年であるが、それは明治32(1899)年測図の地形図の修正版である。また、「芸北地方(三段峡及びその周辺)植生の研究」所収の植生図のもとになった地形図(昭和26<1951>年7月30日発行)の測量年は昭和24(1949)年であるが、それは高橋氏がもとにした地形図(昭和10<1935>年7月30日発行)の応急修正版⁽³⁰⁾である。

このようなことから、高度経済成長期の直前の植生景観としては、米軍撮影の空中写真による1/10,000地形図をもとにした植生図の方が、当時の実態をより正確に示しているものと考えられる。それでも、ササ原を草原に含めれば、草原は落葉広葉樹林に次いで広く存在していたことになる。また、それよりも前の時代においては、草原はさらに広く見られたものと考えられる。

なお、上記のように、大正5(1916)年の時点でも八幡村有林の過半が草原だったことから、それ以降、草原の森林化が急速に進んだことになる。そのことについては、『八幡村史』から、その背景を知ることができる。すなわち、明治44(1911)年に決まった採草配当地については、翌年度から15年の期限で配当が行なわれ、昭和2(1927)年の2度目の配当では20年間の期限で行なわれた。しかし、昭和16(1941)年に配当地の大部分が軍用地として買収されたため、その後の配当は有名無実の状態となり、村民はぼう然自失の有様であったという。ただ、昭和24(1949)年に軍用地の払下げが行われ、田畑に対しての配当面積は従前通りとなり、配当期間が60年間と決定した。それは、山林の運用方法が大きく変化してきていたため、山林は、かつては牛馬の飼料や耕地への肥料用として柴草採取が主な目的であったが、その頃は立木の育成が主体となっていたため、貸付期限も長くする必要を生じたためであった。

このようなことから、昭和16(1941)年に配当地の大部分が軍用地として買収されたことにより、採草ができなくなったために森林化が進むところ⁽³¹⁾ができたこととともに、昭和24(1949)年に軍用地の払下げが行われた頃は、かつて柴草採取が目的であったところが立木の育成が目的となっているところが増え、草原が減少してきていたものと考えられる。このような経緯だけを考えても、高度経済成長が始まる前の昭和20年代の頃の八幡高原の山林は、草原が森林に変化しかけて間もないところも少なくなく、森林には若樹齢の割合が多く、比較的小さな木々が多かったものと考えられる。

ところで、明治32(1899)年測図の1/50,000地形図は、明治28(1895)年式または明治33(1900)年式⁽³²⁾図式で作成され、昭和7(1932)年の地形図(修正版)と昭和24(1949)年の地形図(応急修正版)は大正6(1917)年式⁽³³⁾図式により作成されている。それらの地形図の植生に関する図式については、たとえば明治33(1900)年式⁽³⁴⁾図式にはある「櫛畑」の記号が大正6(1917)年式⁽³⁵⁾図式ではなくなり、一方、大正6(1917)年式⁽³⁶⁾図式ではそれまでなかった「櫻欄科樹林」の記号が増えるなどの変更点はあるが、「荒地」に関する部分⁽³⁷⁾での変更はない。

その「荒地」⁽³⁸⁾の概念については、当時の地図作成の基準について記した文献が参考となる。たとえば、『地形測図方式』では「荒地」についての解説として、「荒地ハ土地肥瘠ノ如何ニ拘ハラズ未タ曾テ開墾セシコト無ク或ハ一旦開墾セシモ久シク人手ヲ下サ、ルカ爲メニ雑草漫生シテ荒蕪ヲ爲スノ土地ヲ云フ」と記されている。また、『測図学教程』では、荒地は「荒蕪シタル土地ノ總稱ニシテ雑草漫生シ往々榛莽繁茂スルコトアリ、荒地通過ノ難易ハ植物ノ種類及其疎密ニ關ス」とある。これらのことから、荒地は概して「雑草が漫生している土地」であったことがわかる。また、『測図学教程』の記述にあるように、「往々榛莽繁茂スル」⁽³⁹⁾ところもあったことがわかる。

榛莽〔しんぼう〕とは、『広辞苑』⁽⁴⁰⁾には「草木の乱れ茂ったところ。しんもう。」とあり、榛莽について述べている他の国語辞典にも似たような説明が多く見られる。しかし、「榛莽」は、そのようなとらえどころのないような植生の状態を示すものではなかったことは、明治期の地形図で「榛莽地」とされているところ⁽⁴¹⁾について、その状態を詳しく記した文書などから確認できる。そうした考察から、「榛莽」は人の背丈にも満たないほどの矮小な雑木を意味し、「榛莽地」はそうした矮小な雑木が多く生えているところ⁽⁴²⁾で、柴地⁽⁴³⁾あるいは柴草地⁽⁴⁴⁾を意味すると考えられる。

一方、明治中頃に作成された1/20,000地形図⁽⁴⁵⁾では、荒地関係の記号として、「尋常荒地」のほか「榛莽ヲ有スル荒地」もあったが、明治24(1891)年式⁽⁴⁶⁾図式以降の地形図⁽⁴⁷⁾図式では、その記号がなくなることから、上記の明治後期から昭和初期における八幡高原の草原(=「荒地」)には「矮小な雑木地を含む草原(榛莽ヲ有スル荒地)」も含まれていると考えられる。とはいえ、明治初期から中期に作成された地形図の「荒地」の概念についての考察⁽⁴⁸⁾などから、その典型的な景観としてススキを中心とした草原(ススキ草原)が考えられることや、上記1950年代の八幡高原の植生に関する調査などから、明治後期から昭和初期にかけての八幡高原でも、その草原はススキを中心としたところが多かった可能性が高いと思われる。

ちなみに、草原的植生にはさまざまなものがあり、過去の統計では、それを「原野」と表現している場合も多い。たとえば、『日本統計年鑑』⁽⁴⁹⁾でも草原的植生は原野とされ、その英訳としてGrassland⁽⁵⁰⁾という語が使われている。その「原野」について、たとえば『本邦原野に関する研究』⁽⁵¹⁾[大迫1937]

では、「原野とは、農業地目（耕地・草地・林地・水敷・雑種地）の一たる草地（Grassland）中の、天然草地（Natural Grassland）に属し、一般に穎花植物（禾本科及莎草科）其の他の草本植物（雑草）及灌木類の自生せる地を謂ふ。」とし、原野を人工草地と区別した上で、草本植物および灌木類が自生する草原的植生地と規定している。また、同書では原野を利用上より分類する場合は、牧野（放牧地・採草地）、柴草山または柴山、萱場の三種に大別することができるとしている。

図2は、筆者が昭和10（1935）年発行の地形図（昭和7〈1932〉年修正測図，1/50,000）をもとにして作成した明治後期から昭和初期の八幡高原（旧八幡村）の植生図である。地形図から植生を読み取る際に、植生の境界が明確でないところも多く、実際の状態と比べ数ha程度の誤差のあるところは少なくないであろうが、その図は、かつて八幡高原にはその西部などに草原（草地）がかなり広く見られたことを示している。ただ、上述のように、その図はその地形図の測量年（昭和7〈1932〉年）の状態を十分正確に反映したものではなく、それよりも少し前の草原の分布を示している部分が多い可能性がある。

一方、図3は、渡邊園子氏らによる近年の植生図をもとに、簡易的に草原と森林が区別できるように作成したものである。近年の八幡高原の区域は、昭和初期の頃よりも少し増えたところがあるが、図3の区域は、図2の区域と同じとした。図3でわかるように、八幡高原には近年でもわずかに草原が見られるところがあるが、その面積は図2と比べ、たいへん少なくなっている。近年の主な草原は、スキー場（やわたハイランド191リゾート）と今は自然公園として草地の維持管理が行われている部分だけである。

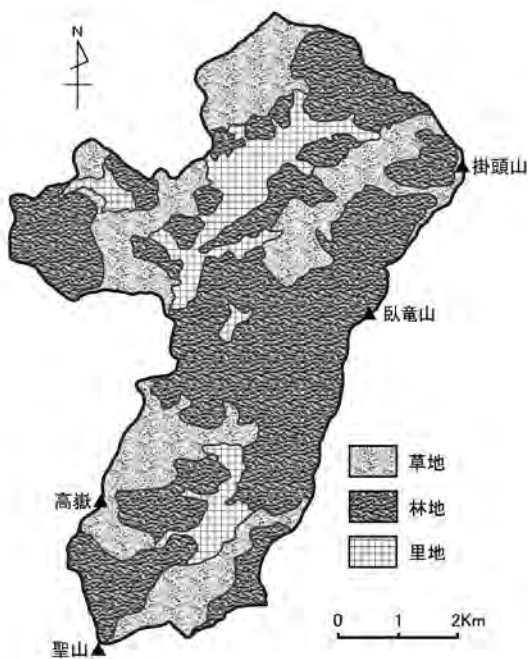


図2 昭和初頭頃の八幡高原における森林と草原の分布図
昭和10（1935）年発行の地形図〔明治32（1899）年測図，昭和7（1932）年修正〕による

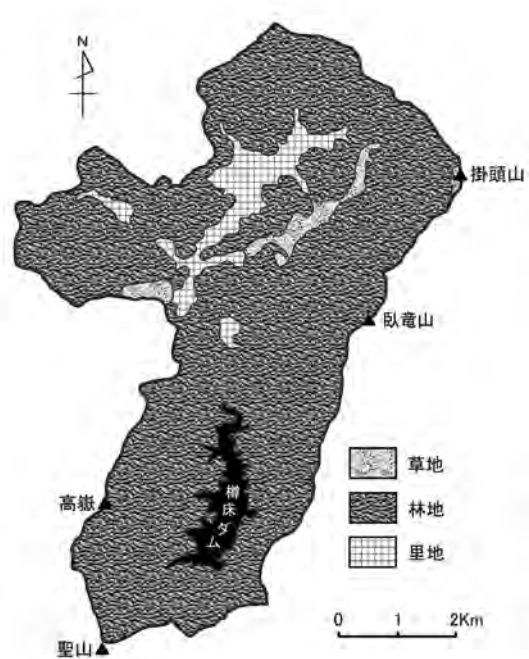


図3 近年の八幡高原における森林と草原の分布図
渡邊園子氏らによる近年の植生図による

(4) 八幡高原における植生景観変遷の背景

a) 文献から

上記のように、八幡高原では、かつては草原が占める割合が近年よりもはるかに大きく、その地での草原の減少は、高度経済成長期を含む過去数十年間における植生景観変化の大きな特徴の一つである。また、植生図や種名表記のみの植生の記述からは分からないが、森林の樹高は、その利用が減った近年では数十年前と比べ概してかなり高くなってきている。このような植生景観の変化は、主に人々の暮らしの変化に伴うものと考えられるが、かつての八幡高原の植生景観の背景については、ダム建設に伴う1950年代の調査や、1980年代の高橋氏の論考などからわかることも多い。

なお、かつて草原が多かったことの背景について、1950年代には一部誤った見方もなされていた。すなわち、堀川芳雄氏らの1950年代の論考の一つでは、⁽⁴⁸⁾同時期の歴史調査において、掛頭山の頂上は正徳年間(1711～1715)より既に広い草原であり、また聖山の山頂一帯にわたる地域も、当時より草原が発達し、そこにはたたら業に使われた馬が放牧されており、文化年間(1804～1818)にはその数が増加し、牛馬あわせて500頭に達したとのことなどが明らかになってきていることを踏まえた上で、次のように記されている。

こうした広い草原は特に掛頭山・聖山及び深入山などの山頂部のちょうど風衝地帯にあたり、落葉広葉樹林伐採跡地あるいは疎開地などで森林植物の侵入がかなり困難と思われる立地環境を占めている。すなわちいわゆる山頂的現象によって、この地方に比較的広い草原が長期にわたって維持されているものとみなされる。

また、たたら業に伴う森林の伐採も大がかりなものであったろうし、他方村落の発達に伴う冬期暖房用としての伐採もさることながら、水田の開発による肥料の自給自足の必要から、村落付近の森林は採草地に利用されたことなども大きな原因の一つに数えられねばなるまい。⁽⁴⁹⁾

上記記述の後半部分については、とくに問題はない。しかし、その前半部分では、広い草原が山頂部の風衝地帯にあたり森林植物の侵入がかなり困難であるために長期にわたって維持されているという見方がなされているが、その調査から半世紀以上を経て、掛頭山や聖山の山頂部でも、元の草原はなくなってしまったことなどを考えれば、その見方が誤りであったことは明らかである。⁽⁵⁰⁾

このように、八幡高原にかつて大面積の草原が維持されていた大きな背景として、自然的要因も考えられた時期もあったが、その主なものは人為的要因である。そうしたかつての植生景観の背景については、1950年代の民俗調査や『八幡村史』などが参考になる。たとえば、「八幡高原及びその周辺地域の民俗」としてまとめられた1950年代の民俗調査報告からは、当時の植生景観の背景にあった事項を知ることができる。表1は、その調査報告において植生景観に関わると考えられることを、主な事項ごとにまとめたものである。主な事項は表の左端に縦書きで示した(以下、表2、表4～5でも同様)。

なお、その民俗調査は主に昭和28(1953)年11月末から12月にかけてと、昭和30(1955)年5月の頃、樽床のほか、その周辺の横川(よこごう)や那須⁽⁵²⁾の部落でも行われたものである。その

表1 「八幡高原及びその周辺地域の民俗」[河岡武春, 木下忠 1959] に記された植生景観に関わる主な事項

<p>牛馬の飼育</p>	<ul style="list-style-type: none"> かつて馬は普通の農家で1～2頭、大きい農家では3～4頭飼われていた。砂鉄や米を運ぶための駄馬であったので、すべてウナミ(めす馬)で、体格も小さく、たけは4尺～4尺5寸ぐらいであった。 農家で飼う牛は、牛耕に使われる役牛で、たいていの家で1頭は飼育している。これらの牛は、みんなコットイ(雄牛)であったので、牛はすべてばくろうがよそからひいて来るベコ(子牛)を買う。在来の牛には、黒、あるいはスダレアカ(虎のような模様)が多く、朝鮮牛は明治44～45(1911～1912)年に入った。 奥山筋在来の家の造りはウチダヤで、家畜は住居と同じ屋根の下に飼われていた。このあたりでは、積雪が2mをこえる場合もあって、根雪は3か月に及ぶので、東北日本の諸村と同じく、牛馬小屋を同屋にしたほうが、冬季牛馬の世話に便利だったのである。 農家では牛馬をたいへんかわいがり、冬、雪の中へ出すことをしなかった。また、いったん飼育した牛馬は、年をとっても手放さず、多くは飼い殺し(死ぬまで飼うこと)にした。馬は20才ともなると、よぼよぼになって、冬は天井からなわでつたりして飼ったという。 牛馬の飼料のうち、大きな比重を占めたものは、しば草で、夏は青草を、冬はほし草を与えた。年間、1頭の牛を養うのに普通100駄(1駄が6わ=120束=30貫)のしば草を要した。牛馬の飼料ばかりでなく、水田にいれるダヤゴエをつくるためにもしば草が刈られた。田1反あたり牛馬に踏ませたしば草を500貫も入れたので、1戸の農家が刈るしば草の量はばくだいなのであった。 男たちは、田植じまいの休みがあげると、朝早くから夕方まで馬をひいて山に行き、しば草を、昼までに1駄、昼から1駄刈って帰った。秋の収穫までの男の仕事といえ、かつてはほとんど、このしば草刈りであったそうである。 夏の青草は、家の回りや田のあぜ、腰林や野山の間で自由に刈られたが、干し草山は、野山・草山の中に家々の刈場を定めていた。上樽床では猫又山と長谷山を、下樽床では聖山と高嶽を1戸につき8町歩ぐらいわりつけた。 干し草は、カヤやハギであったが、よい草がたつように毎年雪が消えると村じゅう総出で、火入れをして山を焼いた。山は下から焼くと広がるので、上から火をつけ、木山にうつらぬよう谷川などを境界としていた。そして8月の盆すぎで2年越の草を刈って、刈場でほして、草ズシに積み、稲刈までに家の近くに運ぶのであった。 草刈場は広がったが、野山や数人共有の腰林は、刈りがち、伐りがちであったので、明治初年には、山がぼうずになり、草もたたず、たきぎも切ることができなくなってしまった。このため、村には、くらしが行きづまるといって、鳥根県へ移住する者も出てきた。明治41(1908)年のころは、その極に達し、樽床においても村寄り合いをして、鳩首協議する日が続き、『西樽床記念報徳社』が組織されることになった。 西樽床では古くから伝わる実測600町歩の数人共有の山を、個人に分割せず報徳社の基本財産として共同管理したので、みるみる草がよくでき木が立つようになった。また聖山45町歩の原野を牧野に供し、田代部落などから借用した45町歩とあわせて、春5月1日～7月15日、秋9月1日～12月10日まで放牧を行い、150頭までを限度として牛馬を預った。
<p>焼畑とソバ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ソバは今日八幡で4町6反ほど作付されているが、かつては、粉食用として山を焼いてずいぶん作った。反収は9斗に達したが、特に樽床ではたくさん作付けし、1石5斗～2石ぐらい作る家が普通で、中には5石もとる家があった。 ソバを作るために、明治初年ごろまでソバヤマ(焼畑)が行われた。大きい山をコックリきり倒して火をつけ、灰になった山をくわで打ってソバをまいた。しかし、明治になって木を立てねば村が疲弊するといわれてソバヤマはやんだ。
<p>薪炭の生産</p>	<ul style="list-style-type: none"> 樽床の人が木炭を焼いたのは、明治33(1900)年がはじめてで、それも松原の人が半分、後藤吾妻氏など部落の人が3人で半分出資して山を買い、ヤマコを雇って焼かせたものである。 八幡で木炭をどんどん焼くようになったのは、大正の終りからで、今日、八幡全体で155名が製炭に従事し、年44,000俵(1俵は4貫)の産額をあげ、製炭による収入は農家経済の重要な地位をしめて来ている。しかしながら、村内の私有林の木炭は、今ほとんどきりつくし、その生産の7割は、鳥根県波佐村の山持三浦氏の立ち木を買って焼いている状態である。
<p>植林と木材利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> 樽床では、明治22(1891)年ごろから安佐郡玖村(高陽町)のゲタヒキが、部落の南西に当る中ノ甲の山の中に来て、盛んにげたをひいた。すなわち、げたひき業者が、横川共有林のシロギ(ホウノキ、ボカノキ)を買って、あらましげたの形にひいたものを、小板や加計まで運ぶ賃かせぎができたのであって、ヒトマル(4わ100束、目方にして70～80貫)のげたを負うて、1わ2分5厘の賃をえた。運ぶばかりか部落の家々でもげたをひき業者に売った。この仕事は日露戦争ごろまで続いたというが、この村でゲタヒキが停止された時期は、ちょうど玖村のげたの製造が雑木げたからきりげたに転じた時期と一致している。 人工林としては、今日、ヒノキが県営で46町歩、スギとカラマツが少規模に行われ、しめて80町歩となっている。この村で古くから行われるスギの造林は、村の東方にそびえる刈尾山(1,223m)や、中ノ甲(1,000m)の天然スギのエダナエをひいて来てさし木するものであった。
<p>クリの利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> この山村のくらしに、多方面に寄与しているものは、なんといってもクリであろう。じょうぶで腐朽しにくいクリは、今日マツと並んで村の建築用材として最も重要な地位をしめているが、かつては太い柱も、はりも、はめ板もすべてクリで造られた家が多かった。水をひく樋もクリの木であり、たんぼのイナグイもクリで作られていた。 明治20年代に入ってまくら木の需要が高まったので、山へ小屋がけをしてクリの木をひき、三段峽をやなでせいて原木を流した。これはかなりの収入になったというが、山陽線の敷設にともなう一時的な仕事であったようである。
<p>マツの利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> マツ材は、木炭と同様、トラック輸送が盛行するにしたがって出荷されるようになった。 以前はしば草刈りが盛んであったので、マツはほとんど立つことがなく、はえても、むしろ抜き捨てるようなありさまであったが、大正年間から馬が少なくなり、干し草を以前ほど刈らなくても済むようになったので、盆地の北及び西側の採草地にマツが自然に立つようになった。 マツ材は用材やパルプ材として出されるのであるが、年間の生産は、八幡全体で平均700石ほどである。 マツは用材としてのほかに、伐採後の松根を掘って燈台の上で照明用にたかれた。
<p>山菜類の利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> 野菜が少ないので、ワラビやゼンマイの出るころは、手間さえあれば大量に採集し、ゆがいて、乾燥させ、だつへ入れて貯蔵した。フキ、ミツバ、タラの芽、ボカ(コシアブラ)の芽、サンショウの実、ナバ(コノハカヅキ=ナラタケ、シイタケ、ヒメジ=シメジ、コウタケ)なども採集されたが、これらは少量でごちそうに使われる程度であった。 リョウボ(リョウブ)の採集時期は、5月25日ごろから6月3日ごろまでである。田植のしたくをしておいて山に入り、木をしなわせたり枝をきったりして葉をこき、イグリ(細いなわで編んだ背負い袋)に入れて負うて戻るのであるが、女でも1日16～17貫は採り、家じゅうでこの仕事を1週間もつづけた。リョウボはゆでてから乾燥させ、その後粉にして貯蔵し年間の食糧にした。
<p>狩猟</p>	<ul style="list-style-type: none"> 八幡高原には鳥獣が少なく、狩の話はほとんど聞くことができない。しかし、横川の谷は深く、重なりあった高い山々には原始林がうっそうと茂り、狩猟の対象も豊富で狩は横川の重要なあいませぎの一つとなっていた。 獣では、クマ、サル、ウサギ、テン、タヌキ、ムジナ(マミともいう)、キツネ、イタチ、イノシシ、シカ、鳥ではヤマドリ、キジ、ハト、カケス、ワシ、タカ、オシなどが獲られる。ただ、イノシシやシカは少なく、今はほとんど見られない。おもな狩猟の対象は、クマ、サル、テン、タヌキ、ウサギ、ヤマドリなどであった。

聞き取り調査では、その当時の話とともに、話者の知る過去の話も含まれている。表中の記述では、できるだけ報告書の記載のままの引用を心がけたが、長文などの一部記述を省略したり、ひらがなを漢字に直したりしているところもある。

表1にまとめた記述からも、高度経済成長期よりも前の八幡高原の植生景観の背景にあった人々の暮らしなどがよくわかる。中でも、牛馬の飼育に関することはとくに重要であり、牛馬の放牧や餌の確保のために、広大な草原が必要であった。そうした草原では、春にはワラビやゼンマイが山菜として大量に採集されたりもした。しかし、大正期から馬が少なくなり、草原の需要が減少し、採草地にマツが自然に増え始めて草原の減少傾向が始まった。

また、薪炭の生産など、森林との関わりも重要である。そのうち、大正の終りから盛んになった製炭は、農家の重要な収入源となってゆき、そのために村内の私有林の炭木は1950年代にはほとんど切り尽くされ、炭の原木の7割を鳥根県から買うことにもなった。そのことから、当時の森林には炭を焼くこともできないほどの小さな木の割合が大きかったものと考えられる。

それでも、大きな木があるところの木を利用して、下駄の製造がなされたりもした。また、クリ材は、一時、枕木用に多量に伐採されたりもした。また、山林の一部にはヒノキやスギなどの植林がなされたところもあった。

狩猟については、植生景観と関係がないように思われるかもしれないが、鳥獣が植生景観を変化させたり、それを維持したりすることもある。たとえば、草食動物が多数いれば、それは草原を維持する大きな力となる。あるいは、紀伊半島の大台ヶ原では、シカがトウヒの樹皮を食べることにより、多くのトウヒが枯れ、またその再生が阻害されていることはよく知られている。八幡高原では、一部を除き鳥獣が少なかったことから、その植生が野生鳥獣により大きな影響を受けることはなかったと考えられる。

なお、『八幡村史』からは、年代ごとの牛馬頭数など、聞き取りからはわからない情報を知ることができる。それによると、たとえば大正5(1916)年には牛馬が合わせて404頭いたものが、昭和20(1945)年には215頭に大きく減っていることもわかる。また、それにより、聞き取り調査報告では簡単にしか述べられていないことを、詳しく知ることができることもある。たとえば、製炭用の木が減ってしまったときのことについては、下記のように記されている。

終戦の直前にいたり軍は強制によって、軍用の木炭を生産するため軍隊を直接これに従事させることになり、炭材は全く底をつく状況となった。終戦となって、復員による家族の増加も農産物の統制はますます厳しく、経済の復興を計るには農閑期を利用して収入源を求めるほかはなく、その路を製炭に依存するところとなったが、到底自村内の山林のみでは賄いきれず、ついに昭和22年より隣接の鳥根県波佐村鍋滝、滝の平、道川村へ進出し炭焼きに従事した。当時炭を焼かざる者は人にあらず、とまでいった。⁽⁵³⁾

高度経済成長期以降のことについては、『八幡村史』や『芸北山村の変貌と再編成』⁽⁵⁴⁾と題した調査報告書からも、その時代における八幡高原の植生景観の背景について知ることができる。たとえば、『芸北山村の変貌と再編成』によると、草原が減少してゆく中、八幡高原などでは大規模草地改良事

業が行なわれ、永年牧草が昭和 35（1960）年には 3.3 ha であったものが、昭和 45（1970）年には 85 ha と約 25 倍に増加したという。また、広い面積を占める私有林については、昭和 41（1966）年に制定された入会林近代化法により森林の私有林化が進んだが、若年労働力不足などにより植林はあまり進まなかったという。

これらのことから、高度経済成長期以降、草原はただ一方的に減少したわけではないこと、また高度経済成長期の頃を中心に、日本各地の山村地域でスギやヒノキなどの植林が急増するところが多かったが、八幡高原ではそうではなかったことがわかる。

なお、『八幡村史』によると、八幡高原の北東部に細長く造成された人工草地は、昭和 16（1941）年に陸軍演習場の設置により買収され、戦後は開拓用地とされていたところであったが、昭和 37（1962）年に芸北町が大規模草地改良事業の指定を受けることになったことにより、農林省より払下げを受け、和牛の若令肥育事業のために畜舎等を建造するとともに草地改良がなされたところで、一時 200 頭にも及ぶ牛が飼育されていたという。今では、その地の牧草利用はなくなったものの、草原景観の維持管理により、八幡高原の中でまだ草原が残る数少ないところとなっている。

その他に八幡高原で今も草原的植生がやや広く存在するところは、地区西方にあるスキー場である。そのスキー場は、国道 191 号線沿いにあることから、平成 22（2010）年までは「八幡高原 191 スキー場」というスキー場名であったが、現在は「やわたハイランド 191 リゾート」と改名されている。

b) 独自の聞き取り調査から

かつての植生景観の背景については、既存の文献から知ることができることも多いが、それについては、まだ古老から直接話を聞くこともできる。文献の記述の確認や、文献には記されていないことを確認するために、平成 27（2015）年 11 月 16 日、八幡高原の「芸北 高原の自然館」に隣接した「かりお茶屋」で、地元の古老から、独自にお話をうかがうことができた。

お話をお聞きした方々は、河野直氏（昭和 9 〈1934〉年生まれ、樽床出身）、後藤斉氏（昭和 11 〈1936〉年生まれ、樽床出身）、河野むつえ氏（昭和 10 〈1935〉年生まれ、樽床出身）の 3 名である（写真 7）。その聞き取りの際には、それらの方々を紹介していただいた「芸北 高原の自然館」の白川勝信氏と河野弥生氏にも同席いただき、一緒に質問をしたり、地元の植物のことなどについての助言をいただいたりもした。表 2 は、その聞き取りから、文献の場合と同様、かつての植生景観の背景にあった人々の営みを中心に植生景観に関わると考えられることを、主な事項ごとにまとめたものである。なお、お聞きしたお話には、個人的な体験とともに、樽床の地域や旧八幡村のかつての一般的な状況についての話も含まれている。お話の内容には、一部不正確なことがある可能性はあるが、地元の町立自然館から紹介いただいた 3 名の適任者からの同時聞き取りということで、近年における聞き取りとしては、意味のある重要なものと考えられる。



写真 7 話をお聞きした方々

右より河野直氏、後藤斉氏、河野むつえ氏

表2 古老3氏への聞き取りによるかつての八幡高原の植生景観に関わる主な事項

牛馬の飼育	<ul style="list-style-type: none"> 牛や馬を飼うのは大変だった。人間が住むところの隣は牛の納屋で、はめ板が境にあっただけで、牛のこっとなこっとなという音がよく聞かれた。二重の板張りになってはいたが、そのようなところで牛を飼っていた。そのため牛は人間によく慣れていた。鶏も飼っていたが、牛と一緒に牛の(餌を入れた)たらいのゴグチ(端)に鶏が上がって、牛に与えていたいな米と一緒に食べていた。 子どもの頃、父がこっとい(雄牛)を飼っていた。ふつうの家では、だいたい牛が一头で、子牛を売ったりしていた。牛とともに馬を飼っている家が3軒ほどあった。 夏場には、遠いところへ草刈りに行った。その時、牛や馬の背中に草を負わせて戻った。草刈りは、聖山の方にも行ったが、草が見えるとはどこでも刈っていた。そのため、山は人が草を刈るのがよく見えていた。 八幡高原では、干し草はだいたい盆までに刈っていたが、樽床では盆を過ぎてから刈り入れ、稲刈りまでずっと草刈りをしていた。 草刈りに行くときには、一日中行くので、山へ木で作った弁当箱を持って行った。 牛を1頭飼っていたら、少なくとも干し草が800束から1,000束なければ冬は越せない。牛がそれをみな食べるわけではなく、牛が敷く草もある。 一日草刈り作業をした場合、夫婦で行って100束くらい作っていた。そのため、その作業が10日ほど必要だった。それを下ろして運ぶ必要もあった。山では草を手で刈り、それを広げて干した。3日ほどすると、よく乾いた。乾かしたものは束ねて、山の上から蹴飛ばして落として、それを集めて、何日もかけて家に持ち帰った。その干し草の束をポートと言っていた。 牛は、荒起こしなどの春の農作業が済んだら、みな牧場へ入れていた。樽床ダムのダム湖は、聖山の名から聖湖になったのだが、その聖山が全部、牛を放牧するための牧場だった。春は、山焼きをしていた。 聖山の牧場は、頂上まで行ったら海が見えていた。春にはワラビやゼンマイがたくさん出ている。牧場へ行く道は牛がつけてくれた。 聖山の牧場は、半分は戸河内町の山で、いくらか借り賃を毎年出していた。
山焼き	<ul style="list-style-type: none"> 山焼きは、樽床の家が全部集まって行っていた。牛を飼って牧場を利用する家はどこも出て50～60人いた。村には子供が残っているくらいのもので、大人は全部出た。 山焼きの後の火がうまく消えず、夜中においおい山が焼けているというようなことが2～3回あった。中ノ甲に向けて燃えたりもした。 火は山の下から周りぐるりと火をつけた。全部草だったからすごい勢いで火が燃えて、時に延焼もした。火が移った時は消しに行った。火がササ藪の中に入ったら、バラバラ、あるいはパチパチと音をたてて焼けていく。ササ藪はササに油があって、燃えるときには結構燃えた。ササは燃えはじめほどよく燃える。燃えた後は芯というか、茎の小さいのが残るくらい。ただ、ササはちょっと大きくなると燃えにくい。 私(河野直氏)は親父がいなかったで、中学生になってから山焼きに行った。山の下から火をつけて回った。みんなそうした。火はばーと燃えて上がるだけで、消す役の人は別にいなかった。燃やした後に残っている火は、木の葉のついた枝ではたいたりして消した。青い葉っぱでたけば結構よく消えた。 山焼きは春、雪が消えてからすぐで、ゼンマイやワラビが出るまでの頃。まだ新しい葉もあまり出ない頃で、前年のカヤの枯れたようなものがあるとよく燃える。
茅場	<ul style="list-style-type: none"> どこの家も茅葺で、屋根のカヤのための茅場があった。それは割と家の近くの自分の土地にあって、毎年それを刈って蓄えた。家で保管して屋根の葺き替えのときにそれを出して使ったが、どこの家でも屋根裏にはカヤがいっぱい入っていた。 茅場は割と広く、報徳社ではなくて各家の茅場だった。茅場には火を入れることはなかった。山焼きをするのは聖山の牧場だけだった。
田の肥料	<ul style="list-style-type: none"> 田んぼを起こした時に、田んぼの土に刈ったササを入れていた。入れた田と、入れない田では米の出来が違った。ササは油があるので、腐ったような匂いがしていた。ササを刈ったのは、わしら子供のときだけ。 また、山の奥の野だや(草場)に牛を連れて行って草刈りをした草を牛に運ばせ、牛小屋に入れてずっと肥を踏ませていた。朝晩通って大変だった。どこの家にも牛はいた。馬のいる家もあった。
焼き畑とソバ	<ul style="list-style-type: none"> 焼き畑があって、ソバをつくっていた。山の木を伐ってそこを焼いて綺麗にして置いて、火を付けて焼いて、その後ソバを蒔いた。それは報徳社の山で、どこの家でもしていた。どこの家でも大概正月にはソバを打っていた。ソバは御馳走だった。 ソバは畑でも作った。畑ではソバのほかにヒエなどもつくった。ヒエは牛に食わせたりもした。普通食べる時には雑穀類を炒つたものを一緒に混ぜて粉にひく。水車でひいてもらった。100%ではない。ふつう小米が入る。ソバだけでは美味しくない。
薪炭の生産と利用	<ul style="list-style-type: none"> 燃料用の薪も用意しなければならなかった。冬は、どこの家も囲炉裏だった。 薪は、山の少ない人は、報徳社で伐る山を決めてもらい、春3月の終わり頃から薪こりといって伐っていた。 今の聖湖の周りは全部報徳社の山で共有地だった。個人の山は背戸山くらいだった。 報徳社をつくった人は、後藤吾妻さんと、樽床ダムの堰堤近くに胸像ができています。川を境に西が報徳社で、東は違う。八幡でも川を境に東と西がある。個人の持ち山は、家の周りにはあったが、遠いところは全部、今の樽床ダム西側の道路から上は全部報徳社のもの。草刈りをすると、報徳社に指定してもらい刈っていた。草刈りの場所は、くじ引きで決めるのではなく、家の近くが指定されたので良かった。 薪や炭にする木は、ふつうあまり大きくはなかった。薪は家の周りに全部積み、冬は納屋の中に入れて。薪や炭には、ナラやクリやボカ(コシアブラ)などを使った。ボカには春早い頃、白い花が咲く。ボカは、ホウの木もそうだが柔らかい。 薪や炭にする木には、ナラの割合が大きかった。あと、ノブ(ノグルミ?)という木もあった。ナラは2種類(コナラとミズナラ)ほどある。ちょっと葉っぱが小さいのと大きな実がなるのと…。皮も薄い分と厚い分と…。どちらもナラ。 多くの人が炭焼きをしていた。炭山の中にはマツの木もあり、それは残したものだった。また、炭山の木を枕木にして出したこともあった。炭焼きの炭は黒炭で、白炭はなかった。朝鮮の人は、中ノ甲で焼いていた。その炭は、縄で編んで作った大きなものに入れて、自動車に積むにも、2人で担いで積んでいた。その一つの重さは60キロくらいあったのではないと思う。その炭も黒炭。民間の人が焼いていた炭は、こもで包んで、4貫(15キロ)くらいの重さだった。 中ノ甲はずいぶん遠かったが、その一帯で炭焼きをしていた。そこは大きな木があるところで、手で割れないのでダイナマイトで割ったりもしていた。私(河野直氏)が中学3年の時、冬に弾薬を運んでくれというので、言うことよく聞く牛を使って運んだ。4トンか5トンの弾薬をそりに積んで運んだ。木に穴を開けてダイナマイトで割った。ダイナマイトと言っても、ろうそくのようなネバネバしたもので、それを穴に突っ込んで火をつけるのではないかとは思いますが、使い方は知らない。ダイナマイトを実際に使うところは、私は見たことはない。
植林と木材利用	<ul style="list-style-type: none"> 山に木を植えるようなことは、あまりなかった。 八幡では宮島の杓子用に半製品を宮島の方に出したこともあったが、樽床でもそのようなことをしていた人もいた。シミズトクイチという人は、杓子を山小屋で作っていて、一年中そこへ寝泊まりしていた。村から割と近くで、カワモトというところから奥へ入ったところ。そのあたりにはボカやホウノキなどがたくさんあり、そうした木を割ったり削ったりして作ったものを宮島に出していた。そこにはクリの木も多かった。雑木山で、そこも全部報徳社の山。炭を焼く人も報徳社に分けてもらっていた。杓子を作っていたのはその人だけだった。

<p>クリの利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クリは炭にしたりもしたが、一方で枕木にもした。また、家を造る材料にも使った。クリの木は腐りにくい木で、大事にするように言われた。 ・山へクリ拾いにも行った。ほかの人も行くので暗いうちから起きて行った。稲刈りの最中にクリ拾いに行って早く戻って来なかったの、戻ってからたいそう叱られたこともある。クリ拾いには、子供も大人も行った。 ・拾ったクリは、冬のおやつのように食べていた。蒸しておいて囲炉裏で火を焚いて鍋で炒って食べた。また、クリを小豆と一緒に煮て餅のあんこにもした。渋皮はゆがいたり蒸したりして取った。また、干したクリの渋皮を水車でついても取った。ついた後に篩(トウシ)で下す。篩で下したら、皮が残る。また、唐箕にかけたりもした。 ・今は前のようにクリが山にならないが、前はよくクリがなっていた。草を刈ったところに、たくさん落ちていた。実もちょっと大きめなものがあったりもした。山に拾いに行くシバグリは、少し小さい。大きなクリではなかった。
<p>マツの利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マツ林は結構あったが、薪用の林が十分あり、マツを意識して使うことはあまりなかった。ただ、一時マツも枕木用に出したこともある。マツ林で松葉掻きをするようなこともなかった。 ・マツの木のこぶは、燃やすと油のようなものが出て、灯りにもなった。囲炉裏の上に天井からつるし、切って割ったものをランプ替わりに燃やしたが、結構長く持った。 ・戦争の終わりの頃には、松根油を取るためにマツの根を掘って、それを切って割って原料にした。しかし、その油を絞る工場ができて間もなく終戦になった。どれくらい油が採れたかは知らない。
<p>蓑</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・蓑も家で作った。それを作るのに、コウラ(オクノカンスゲ)がいる。また、それを編むのにシナノキのシナ(樹皮からとった繊維)がいる。それは柔らかくて水を吸わない。麻などは水を吸う。シナノキの樹皮は、池に何日も漬けて腐らせて繊維を取った。シナノキは、切り倒して使った。材の部分は、祭りの前などに下駄にしたりもした。シナノキを切った後には、また萌芽が出てくる。
<p>山菜類の利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼンマイは聖山に採りに行った。牛の糞跡によく肥えたのがあった。聖山では、ゼンマイのほかにもワラビもたくさん採れた。ウドも採ったが、ウドは谷に多かった。ボカ(コシアブラ)も食べていた。わたしらの時代は食糧難の時でリョウブもリョウブ飯にして食べていた。リョウブ飯やダイコン飯などを食べ、白いご飯はあまり食べなかった。米が少なかったの、何か混ぜたのが多かった。リョウブ飯には、米はわずかしが入っておらずいやだった。 ・餅にリョウブを入れることもあった。餅にはヨモギやウラジロも入れた。ウラジロを入れた餅はてんこ餅と言って、ウラジロを粉にひいて、二番米と一緒に粉にして、ソバのようにこねて、少しもち米を入れ、それを蒸して作った。白い餅は正月だけ食べたが、ふつう食べることはなかった。 ・ウラジロもひじり山の方から採ってきた。草地があるところでないとなかった。ワラビやゼンマイほど沢山はないが、一箇所結構とれるところがあった。まとまって生えていた。干し草を刈った後の縁のほうでよく出ていた。ワラビも干し草を刈っていた時にはよく出ていた。干し草を刈るときは、ワラビが大きく成長してから刈る。次の年にはそこにワラビが出る。タラの芽も食べた。 ・ヤマナシ(オオウラジロノキ)もあったが、大きな山に入らないとなかった。ヤマナシは、あまり大きくはなく、(秋の頃は)かなり洪かった。冬場に山へ遊びに入って、雪の中にスポッと落ちたヤマナシを探し、拾って食べたものはおいしかった。 ・秋はアケビもあった。 ・秋にはコノハカツギとかネズミタケも採れた。中ノ甲へはシイタケを採りに行った。炭用に伐った後の切り株などに生えていた。どこにその切り株があるか覚えておいて、毎年採りに行った。中ノ甲は結構大きな木があったところで、所有は戸河内かと思う。中ノ甲を閉鎖したときに、営林署が1億円で買ったと『樽床誌』には書いてある。 ・マツタケは全くなかった。マツはあったが、マツタケはなかった。 ・タタラシバ(サルトリイバラ)を使った団子があった。タタラシバは、樽床ではちょっと山に行けばいっぱいあった。団子シバとも言った。また、ゴトウツク(カシワ?)も使った。ゴトウツクとも言った。ナラの種類のような木。タタラシバを使う人もいれば、ゴトウツクを使う人もいた。いよいよない時はササの葉を使った。タタラシバは匂いが良い。
<p>麻</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・牛の鼻を引く綱は麻で作っていたかもしれない。どこの家でも麻畑があった。麻は盆前ごろから蒸して繊維を取った。麻殻(オガラ)は草屋根の下の土台にもした。雪囲いの壁にしたりもした。 ・高さ1間半(約2.7m)ほどもあったが、結構高い釜があって、それで麻を蒸して繊維をとった。釜は資料館にもある。一度に何軒かの家で共同でその作業をすることが多かった。釜が冷えないうちに次の者が麻を入れて火をたいた。蒸したものは一度川へ漬けて冷やし、それを持ち帰ってスコップで掬っていた。うまくやる要領があった。 ・その後、軒口の外に棚をつくり、それにかけて干した。夜は、夜露にぬれないように、それを軒口まで押し込んだ。取れた皮は、また蒸して、黒いところをのけて綺麗にして繊維にし、縄になったり牛の綱にしたりした。牛の綱は、3人であった。一度なったものを3本集めて牛の綱にした。 ・草鞋のツマゴイには麻を使った。冬に履く靴は、麻が使えなくなって長靴になった。 ・稲の藁縄も使ったが、麻は高級だった。 ・麻は実も食べた。餅についたり、塩漬けにしておいて、寿司の上につけたりもした。寿司の中の具はゼンマイやシイタケやごぼうなどが入っていた。
<p>戦後の開拓</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・樽床ダムの西の道沿いに、大和ハウスの別荘地がある。そのあたりを戦後の食糧難の時に開拓した。作物は米。大和ハウスの別荘地に入るところの手前に橋がある。その下から井手を付けて水を取った。田んぼは、みんなで手で耕した。広いところだけ開拓した。子どもは多いし、分家さすにはよかった。 ・それは戦後間もない頃で、わしらが中学校のとき。昭和25年頃から始まったと思う。24年か25年か、その頃。それから間もなくダムができることになった。 ・そこで5~6年ほど米を作って百姓をしたが、米は美味しくなかった。はじめは、今のようにいい肥料もなく、ササを刈って入れるくらいのことだった。その頃、ほかにも樽床で開拓したところがあった。 ・また、八幡高原の千町原には開拓団が入った。元の兵舎がそこに十軒かあった。しかし、その後だんだん状況が変わり、町がにぎやかになり、みな町へ帰って行った。開拓団の人たちは、朝鮮や満州の方に行っていた人たちだった。
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ダムができる前に樽床にいた人の多くは広島の方に行った。遠いところでは、ブラジルに行った人もいる。八幡に残った者は少ない。ダムができたのは高度経済成長期の始まりの頃だったが、町の方がいいと思う人が多く、八幡高原に住もうと思う人は少なかった。 ・昭和34~35年頃ではないか。豪雪があった昭和38年には、浜田の方からガスを運んでいた。大雪が降って、浜田に行けないときは、萩の方に回った。 ・神社には大きなご神木の木があった。それはスギで、なんとか3人が手を広げて抱えることのできるほどの大きな木だった。

この独自の聞き取り調査からも、かつての植生景観の重要な背景として、牛馬の飼育に関する
ことがあり、牛馬の放牧とともに、人々が牛馬の飼料や農地の肥料用として大量に草を刈っていたこ
とが、草原景観の背景として大きかったことが確認できる。また、草原維持のために、春の山焼き
も重要な役割を果たしており、そのときの樽床での具体的な山焼きの状況なども知る⁽⁵⁵⁾ことができた。
山焼き（野焼き）は、火勢を強めないために、山地上部から点火してゆくところもあるが、樽床の
場合は山の下から点火し、火勢が強くと時々延焼もしたという。

また、薪や炭にする木は、ふつうあまり大きな木ではなかったこと、山に木を植えるようなこと
はあまりなかったこと、山で杓子用に木材加工をしていた人は少なかったことなども確認するこ
うができた。

(5) 写真に見る高度経済成長期前の八幡高原

写真8、写真9は、高度経済成長期前に米軍により撮影された空中写真である。

そのうち写真8は、昭和23（1948）年4月18日に撮影されたもので、八幡高原の南部、樽床付近である。写
真は、少し明るめに、またコントラストを強めに調整したものであるが、白っぽく見えるところの大部分は草地
である。また、ライン状に道なども同様に白っぽく見える。この撮影時期には、多雪地帯の樽床付近でも、雪は
ほとんど残っていないと考えられるが、紫外線が強くなり始める季節のため、写真のコントラストを強めたりす
ることにより、草原などが白っぽくなるのである。

この高度経済成長期よりも少し前の時代は、上述のよ
うに、大正期や昭和初頭の頃と比べると草原はだいぶ減っており、写真の左方（西方）の高嶽付近
も、その山頂に近い部分を除き大幅に草原の減少が確認できるが、それでもまだかなり草原が見ら
れるところがあったことがわかる。また、写真下方（南方）の草原部分には、色の濃さなどから常
緑のアカマツの可能性が高いと思われるやや高木の樹木が点々と多く見られる。比較的色の薄い部
分は、まだ葉の出ていない落葉広葉樹の林と見られるが、この写真では認識しにくいものの、写真
を拡大してみても、樹冠確認ができないところが多く、低木の樹木が多いところが多かったことが
わかる。

写真9は、臥竜山西方の八幡高原の集落やその裏山を昭和27（1952）年4月30日に撮影したも
ので、写真の右上端近くには、八幡小学校のグラウンドなどが白っぽく見える。この写真から、高度
経済成長期が始まる直前の頃、この付近の里山には草地はわずかしかなかったこと、里山の落葉広
葉樹林には、樽床付近と同様に小さな木が多いところが多かったが、一部には（やや）高木の落葉
広葉樹林も見られたこと、また写真上方（北方）などの一部にはアカマツやスギなどと思われる高
木の常緑針葉樹の林や単木があったことなどがわかる。

なお、写真10は、写真9と同じ場所の近年の様子である。Google Earthによるもので、画像の

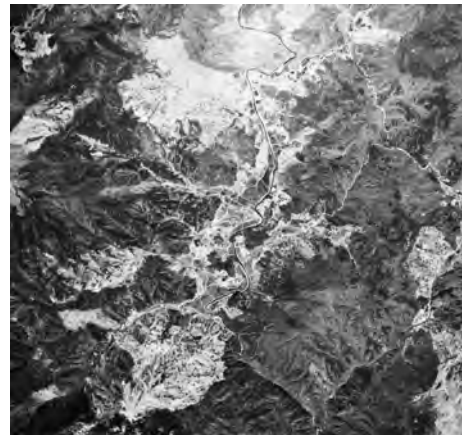


写真8 八幡高原南部、樽床付近の空中写真
昭和23（1948）年4月18日米軍撮影

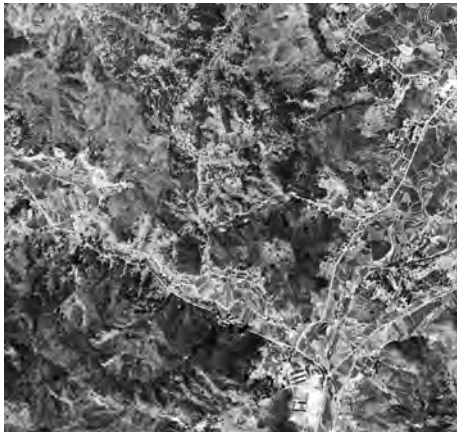


写真9 臥竜山西方八幡高原の里地里山の空中写真

昭和 27 (1952) 年 4 月 30 日米軍撮影：
写真の右上端近くには、八幡小学校
のグラウンドなどが見える

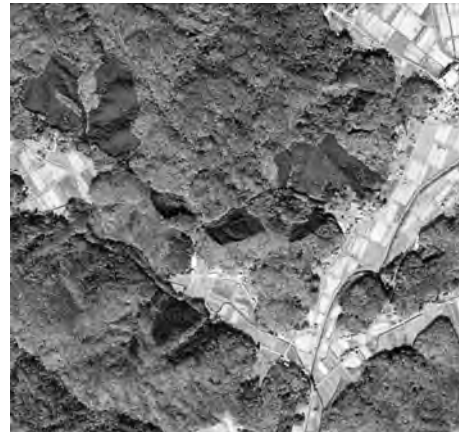


写真 10 臥竜山西方八幡高原の里地里山の空中写真

Google Earth 画像
平成 26 (2014) 年 11 月 5 日撮影

撮影年月日は平成 26 (2014) 年 11 月 5 日である⁽⁵⁶⁾。白黒写真ではわかりにくいですが、元のカラー写真を見ると、その付近の里山には紅葉した落葉広葉樹林が多く、写真上方（北方）などの一部には、アカマツ林と見られる常緑樹林も少なからず見られること、一部にはスギかヒノキと思われる植林地（森林の境界が明瞭で、白黒写真ではとくに黒っぽく見える）があること、また、それらの森林のほとんどは、樹冠の大きさなどから高さが少なくとも 10m 以上と思われる高木の森林であることなどがわかる。

(6) 八幡高原における植生景観変遷のまとめ

八幡高原の山地部は、今はコナラなどの落葉広葉樹林あるいはアカマツ林などの森林で大部分が覆われているが、その地域ではかつて草原も広く見られた。そのことは、明治から大正初期頃の記録やその頃作成された地形図からも確認することができ、当時その地の草原面積は森林面積を上回るほどであったと考えられる。その広大な草原の背景には、400 頭を上回る牛馬の放牧やその飼料確保、農地の肥料や茅葺きの屋根の材料確保などの必要があったことが大きい。

しかし、大正初期頃以降、その地の草原は大幅に減少してゆくことになった。その減少の初期段階として、大正初期頃から第二次世界大戦終了間もない頃においては、牛馬頭数の大幅な減少とともに、薪炭用などの目的で草原の樹林化が進められたことがあった。それによって、第二次世界大戦後間もない頃には、草原は森林面積の 1/5 近くにまで減ることになった。

その後、その地では、高度経済成長期に畜産振興のために大規模草地改良事業が行なわれ、牧草地が大きく増えた時期もあったが、畜産業の衰退や、農地の肥料や茅葺きの屋根の材料確保などといった、かつて草原に求められていたものの必要性の大幅な減少とともに、草原の減少は続くことになる。そして、今も残る主な草原は、スキー場と自然公園として草地の維持管理が行われているところだけとなっている。

一方、戦後間もない頃の記録や空中写真から、当時その地でさかんに行われていた製炭活動のために炭材が不足しており、里山の森林には大きな木が少なかったことがわかる。しかし、高度経済成長期におけるいわゆる燃料革命により、そうした薪炭需要が急減し、炭材の供給地であった雑木

林の木々は放置化され、森林の大部分が、高木の森林となっていった。

なお、高度経済成長期の頃を中心に、全国的にはスギやヒノキなどの植林地が急増したが、八幡高原では近年でも植林地は全森林面積の1/10 足らずに過ぎず、その増加は緩やかであった。一方、マツ林は植林地の倍ほどの面積もあるが、それはかつての民俗調査記録などから、草原需要の衰退に伴い、草原的なところに自然にマツが侵入してできたものが多いと考えられる。

②……………秋吉台における植生景観変化とその背景

(1) 秋吉台について

秋吉台は、山口県中西部の美祿市東部に位置する日本最大級のカルスト台地である。地質学的・地理学的の特異性から1900年代初頭より科学的な調査研究が継続的に行われてきており、国指定特別天然記念物、国定公園などの指定を受けている。そこは草原カルストとしてもよく知られ、早春の山焼き（野焼き）など、様々な人間活動により草原環境が保たれてきている。

なお、秋吉石灰岩は北方より流下する厚東川により東西に二分され、広義の秋吉台が石灰岩地域全域（約100km²）を指すのに対して、狭義では厚東川以東の石灰岩台地（約50km²）を指す。狭義の秋吉台は一般に東台と呼ばれ、国定公園の指定範囲（約45km²）とほぼ重なる。また、台地上の草原範囲（12.5 km²）を中心に国の特別天然記念物（13.84 km²）に指定されている。本稿で秋吉台と呼ぶのは、おおむね国定公園に指定されている狭義の区域である。



写真11 秋吉台の現況(1)



写真12 秋吉台の現況(2)

(2) 秋吉台付近の植生景観の変遷

a) 写真からわかる高度経済成長期前から近年にかけての変化

先に述べた八幡高原と異なり、秋吉台には今も草原の景観を広く見ることができる。写真11～13は、平成26(2014)年11月に撮影したものであるが、そこには高木の樹木が全く、あるいはほとんど見られないところが多い(写真11～12)。一方、写真13の右手中央から上の部分などのように、森林が広がっ



写真13 秋吉台の現況(3)

ているところも一部に見られる。

この秋吉台の草原も、過去数十年の間に、少し減少してきている。そのことは、戦後間もない頃に撮影された空中写真と近年の空中写真を比べてみてもわかる。写真 14 は、昭和 23 (1948) 年 4 月 7 日に米軍により撮影された秋吉台付近の空中写真である。一方、写真 15 は、写真 14 とほぼ同じ場所を平成 12 (2000) 年 11 月 4 日に国土地理院が撮影した空中写真である。

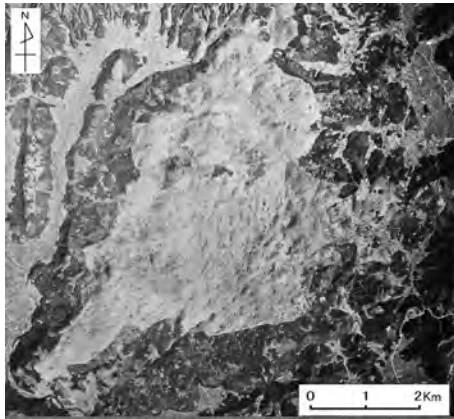


写真 14 秋吉台付近の空中写真
1948 年 米軍撮影

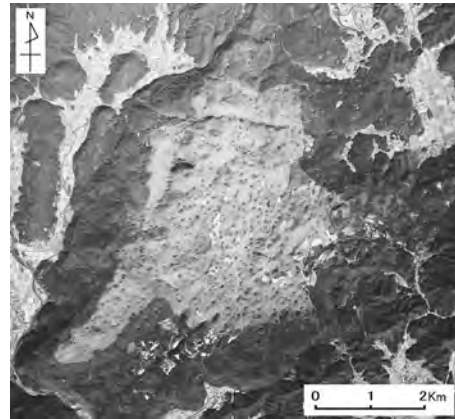


写真 15 秋吉台付近の空中写真
2000 年 国土地理院撮影

秋吉台の草原は、それぞれの写真中央付近の色の薄い部分で、写真の中で大きな広がりが見られるところである。その草原の周辺などに見られる色の濃い部分が森林である。昭和 23 (1948) 年の写真は、まだ落葉樹の葉が展開していない時期のものであるため、落葉樹林の部分の色合いは常緑樹林に比べると薄い、それでも草原と比べると色合いが濃いことや、樹幹や樹冠が見えることで草原と区別することができる。

2 枚の写真は、その中央付近に広く草原が見られるという点では似てはいるが、少し詳しく見ると、50 年余りの間のいくつかの変化が確認できる。その一つが、草原面積の減少である。2 枚の写真は、元の写真を適度に回転させたり拡大・縮小したりして同じ位置関係で対比できるようにしたものであるが、秋吉台の西方 (写真左手) や南方 (写真下方) を中心に、明らかに草原が減少していることがわかる。また、昭和 23 (1948) 年の写真を見ると、秋吉台の主な草原の周辺にも、大小の草原や草原的植生が見られたところが多く確認できる。また、写真をだいぶ拡大して見る必要があるが、昭和 23 (1948) 年の写真に見られる森林には、樹木が小さいものから大きなものまで、さまざまな大きさの森林が広く見られるのに対し、平成 12 (2000) 年に撮影された写真では、小さな樹木の森林はごくわずかし確認することができない。あるいは、石灰岩台地である秋吉台には数多くのドリーネ⁽⁵⁷⁾があり、それは昭和 23 (1948) 年の写真でも、そこに見られる太陽光の影などから、その存在の大部分を確認することができるが、平成 12 (2000) 年に撮影された写真では、ドリーネの多くが黒っぽい点状に見えている。それは、ドリーネの土地利用の変化に伴い、そこが森林化するなどして植生が変化したことによるものである。このことについては、古老への聞き取り調査からも確認できる。

b) 秋吉台の草原をめぐる明治期から昭和期の動き

秋吉台の場合、先に記した八幡高原に比べれば、草原の減少の割合はかなり小さいとはいえ、それでも戦後間もない頃に比べると、明らかに草原が減少している。そのような秋吉台をめぐる社会的な動きとして、どのようなことがあったのだろうか。ここでは、そのことを考えるために、秋吉台が属した2つの町の町史、『秋芳町史』⁽⁵⁹⁾と『美東町史 通史編』⁽⁶⁰⁾をもとに、明治期から昭和期における秋吉台に関わる年表を作成した(表3)。そのうち『美東町史 通史編』をもとにした記載には典拠史料が各記述の最後の括弧内に記されている。その年表からわかる秋吉台の草原をめぐる明治期から昭和期の主な動きとして、次のことがあったことがわかる。

表3 秋吉台に関する年表(明治～昭和) 『秋芳町史』、『美東町史』をもとに作成

年	『美東町史 通史編』より	『秋芳町史』より
明治12年(1879)	秋吉台山大理石鉱・赤村銅鉱借区開坑【山口県文化史年表】	
明治18年(1885)		広島野戦砲兵隊秋吉台を実弾演習に使用。
明治24年(1891)		特例として秋吉台林野の下戻を許可。
明治29年(1896)		山口歩兵連隊の一部秋吉台で演習。
明治30年(1897)	秋吉台に山口歩兵42連隊の演習場設置【演習場小誌】	
明治31年(1898)		山口歩兵42連隊成立、この年より秋吉台を演習場に使用し、太平洋戦争の終末におよぶ。
明治32年(1899)		国有森林下戻法制定。
明治35年(1902)	8月、国有林野の払い下げを受ける【大田町会議録】	国有林野下戻により林野整理に着手、村有林の経営。
大正3年(1914)	7月15日、陸軍第五師団、秋吉台大田演習場で特命検閲野外演習実施、日射病で死者八名【防長新聞】	
大正11年(1922)	3月3日、景清穴、国天然記念物指定【山口県文化財概要】 10月12日、陸軍第五師団と関係五ヶ町村が賃借契約、秋吉台を中心とする一帯約1,700町歩を演習場として使用【会議録】	秋吉滝穴天然記念物に指定、秋吉村の管理となる。広島第五師団と秋吉台大田演習場の賃貸契約成る。
大正12年(1923)	3月7日、大正洞、国天然記念物指定【山口県文化財概要】	中尾洞天然記念物に指定。小沢儀明博士秋吉台の地層逆転構造説を発表。
大正14年(1925)	小沢儀明博士、秋吉台逆転構造説発表。	
昭和元年(1926)		東宮殿下滝穴に行啓、のち入江侍従長より秋芳洞と命名。
昭和3年(1928)		地獄台天然記念物に指定。
昭和4年(1929)	2月25日、防長自動車株式会社、小郡-秋芳洞間を四往復に増便【防長交通六十年史】	
昭和10年(1935)		秋吉村設観光事務所開設。
昭和20年(1945)	10月、農村中堅者養成のため秋吉台軍用地に農事講習所を設置【山口近代農学発達史年報】	
昭和21年(1946)	11月8日、山口-吉則(現在の美祿)間、階徳-秋芳洞間を開業【国鉄中国自動車三十年史】 11月25日、山口市進駐占領軍ニューージーランド部隊、実弾射撃を大田町赤郷村の一部山岳地帯で実施【庶務雑件】	山口駐留ニューージーランド部隊秋吉台で実弾演習。国鉄バス秋吉線開通。
昭和24年(1949)		皇太子殿下秋芳洞・秋吉台を見学、後に台上の展望地を「若竹山」と命名。駐留米軍秋吉台を使用。

年	『美東町史 通史編』より	『秋芳町史』より
昭和 25 年(1950)		秋吉台毎日新聞社主催の「観光百選」に入選。
昭和 26 年(1951)		この年秋吉台八景を選んだ。
昭和 27 年(1952)		秋芳洞特別天然記念物に指定。
昭和 29 年(1954)		国鉄バス秋吉台登山の運転開始。
昭和 30 年(1955)	11 月 1 日, 秋吉台, 国定公園に指定。 在日米軍, 秋吉台を爆撃演習場に使用申し入れ【秋吉台大田演習場小誌】	在日米空軍秋吉台を爆撃演習地に使用の申入れ。秋吉台国定公園に指定。
昭和 31 年(1956)	5 月 1 日, 美東町・秋芳町民, 爆撃演習反対の第 1 回総決起大会を開催。「大田演習接収解除促進期成同盟」を結成【秋吉台大田演習場小誌】 秋吉台学術調査団結成【秋吉台大田演習場小誌】 衆議院内閣委員会秋吉台現地調査【秋吉台大田演習場小誌】 11 月 29 日, 大正洞に照明施設が完成【町制二十年のあゆみ】	演習地反対総けつ起大会。大田演習場接収解除促進期成同盟結成。 秋吉台科学調査団編成。衆議院内閣委員会秋吉台現地調査。米軍秋吉台演習地使用の申入れ撤回。
昭和 32 年(1957)	12 月 16 日, 台山大田演習場が接収解除, 演習場返還式開催【秋吉台大田演習場小誌】	秋吉台登山若鳩観光道路完成。大田演習場返還式。読売文化映画「秋吉台」封切。秋吉台青少年宿泊訓練所開設。秋吉台展望台完成。
昭和 33 年(1958)		
昭和 34 年(1959)	5 月 10 日, 大正洞 - 絵堂間のバス開通【町制二十年のあゆみ】	秋吉台科学博物館開館。
昭和 36 年(1961)	10 月 19 日, 秋吉台, 国天然記念物指定。	秋吉台天然記念物に指定。
昭和 37 年(1962)	5 月 18 日, 台山放牧場完成, 入牧開始【町広報】	秋芳洞琴ヶ淵の潜水調査。岩永旦の山地開拓, 石棺群発見。
昭和 38 年(1963)		国民宿舎若竹荘落成開館。秋芳洞黒谷支洞開通。第 18 回山口国体開幕, 山岳競技秋吉台で開催。天皇后両陛下秋吉台・秋芳洞に行幸啓。秩父宮, 三笠宮妃殿下行啓。
昭和 39 年(1964)	7 月 10 日, 秋吉台, 特別天然記念物に指定【町広報】	行幸啓記念碑建立。秋吉台, 特別天然記念物に指定(面積 1,384ha)。高松宮殿下秋吉台に行啓。
昭和 40 年(1965)	3 月 28 日, 防府 - 秋芳洞観光特急バス日祝運行開始, 翌年 4 月 1 日, 秋芳観光特急バス定期便化【国鉄中国自動車三十年史】	住友セメント秋芳鉱業所操業開始。秋芳洞観光センター落成。
昭和 42 年(1967)		常陸宮殿下秋芳洞に行啓。
昭和 43 年(1968)	5 月, 山口県育成牧場秋吉台団地の放牧開始【町広報】	
昭和 44 年(1969)		秋芳町自然保護協会結成。
昭和 45 年(1970)	10 月 5 日, 秋吉台有料道路開通【町広報】 11 月 30 日, 観光センター (奥秋吉台観光センター・大正洞案内所・給水施設), 完成【町広報】	秋吉台管理事務所設置。秋芳洞観光案内所落成。秋吉台有料道路開通。
昭和 46 年(1971)	4 月 1 日, 国鉄バス, 秋芳洞 - 大正洞間 (11.9 キロ) 開業【国鉄中国自動車三十年史】 防長交通, 秋芳洞 - 大正洞間運行開始【防長交通六十年史】	秋吉台管理事務所竣工。
昭和 48 年(1973)	1 月 31 日, 秋吉台少年自然の家, 完成【町広報】 7 月, 景清洞観光センター落成【町広報】	秋吉台保存管理マスタープラン合意書調印。西日本オリエンテーリング大会開催 (秋吉台)。
昭和 51 年(1976)		自然休養村整備事業着手。
昭和 52 年(1977)	7 月 22 日, 秋吉台サファリランド開園, バスを乗り入れる【防長交通六十年史】	秋吉台科学博物館にオオツノシカ標本模型設置。
昭和 53 年(1978)		秋芳洞バスターミナル増設。
昭和 54 年(1979)		秋芳洞貸切バス駐車場開設。自然休養村管理センター落成。第 1 回秋芳町観光花火まつり。
昭和 55 年(1980)		自然休養村整備事業完了。
昭和 59 年(1984)	5 月 12 日, 県道山口秋吉台公園自転車道, 完成【山口県の道路】	秋芳洞黒谷アーケード新築。サイクリングロード「山口・秋吉台公園自転車道」完成。
昭和 63 年(1988)		秋芳洞で二つの新洞発見。

まず、明治18(1885)年以降、昭和前期の第二次世界大戦終結まで、秋吉台は軍の演習場として実弾演習などが行われた場所であった。また、戦後も昭和21(1946)年に進駐占領軍ニュージージーランド部隊が秋吉台で実弾演習を行っている。また、昭和24(1949)年にも駐留米軍が秋吉台を使用している。ただ、その後昭和30(1955)年の在日米軍による秋吉台を爆撃演習場に使用することの申し入れに対し、地元の爆撃演習反対の動きが高まり、昭和32(1957)年12月16日に演習場の接収が解除された。長年にわたり秋吉台が軍事演習に使われてきたのは、秋吉台には広大で比較的なだらかな草原が広がり、演習の適地であったからであろう。

一方、秋吉台の草原をめぐる明治以降の重要な動きとして、その地が天然記念物や国定公園などに指定されることなどによる観光地化があった。たとえば、秋吉台は昭和30(1955)年に国定公園に指定され、また昭和36(1961)年には国の天然記念物に指定されている。また、秋吉台のあたりにはいくつもの大きな鍾乳洞があり、その中には国の天然記念物に指定されているものもある。そうしたことから、しだいに秋吉台付近の観光地化が進み、たとえば昭和38(1963)年には国民宿舎若竹荘が開館し、昭和45(1970)年には秋吉台有料道路が開通するなどした。このような観光地化の流れの中で、秋吉台にとって重要な草原の景観を残してゆくことは、大事なこととなっていたものと考えられる。そのことは、後述の古老への聞き取りからも確認できる。

一方、戦後、秋吉台の環境を利用して畜産を振興しようとする動きも見られた。たとえば、昭和37(1962)⁽⁶¹⁾年には美東町営の台山放牧場が完成し、入牧が始まっている。また、昭和43年(1968)には山口県育成牧場秋吉台団地の放牧が開始されている。

c) 独自の聞き取り調査から

秋吉台の植生景観変遷の背景について知るために、秋吉台に長く関わってこられたお二人の古老から個別に直接話を聞くことができた。お話を聞きしたのは、前田時博氏(昭和13年生まれ、秋吉台南方の隨徳在住)と末永忠雄氏(昭和11年生まれ、秋吉台西方の青景在住)である。お二人には、平成27(2015)年11月にお聞きした話を活字化したものを、1年後の平成28(2016)年11月に確認していただき、その修正等をしていただいた。

前田時博氏への聞き取りの際には、同氏を紹介していただいた秋吉台科学博物館の太田陽子氏に同席いただき、また末永忠雄氏への聞き取りの際には、やはり同氏を紹介していただいた太田陽子氏とともに山口大学農学部の藤間充氏にも同席いただき、一緒に質問をしたり、秋吉台の植生のことなどについての助言をいただいたりもした。表4と表5は、その聞き取りから、かつての植生景観の背景にあった人々の営みを中心に、秋吉台の植生景観にまつわることをまとめたものである。

なお、お聞きしたお話には、個人的な体験とともに、それぞれが属した地域のかつての一般的な状況についての話も含まれている。お話の内容には、一部不正確なことがある可能性はあるが、地元の博物館から紹介いただいたそれぞれの地域の最適者からの聞き取りということで、近年における聞き取りとしては、意味のある重要なものと考えられる。

i) 前田時博氏への聞き取りから

表4は、平成27(2015)年11月28日に秋吉台科学博物館で前田時博氏(写真16)よりお聞き

した内容を、秋吉台の草原に関わる事項ごとにまとめたものである。そのお話から、秋吉台の南側集落（隨徳）で生活してこられた同氏の長年の体験などを詳しく知ることができる。以下はその概要である。

秋吉台の草原に関わる重要なこととして、そこでの草刈りがあった。私の家では、戦後も秋吉台の明現原（みょうげんばら）やナガジャクリの辺に行き草刈りをしてきた。その草刈り場にはササが多く、ササは秋にはより固くなるため、夏の前半からせいぜい8月頃に刈るのがよかった。刈る草はハギもよいが、ハギには木の部分があるため、できるだけネザサやチガヤの多いところを選んで草刈りをした。ススキは残しておいて茅葺用にした。ドリーネのめぐり（すり鉢状の地形の斜面部分）は刈らなかった。ドリーネの底は私有地で、めぐりは私有地ではなかったが、不文律でドリーネの底の所有者がその部分を使っていた。ドリーネのめぐりより上の部分は、全くの共有地であった。

草刈りは早朝の仕事で、夏草に朝露が付いているとよく切れて草が刈りやすかった。草は良いところがあれば早い者勝ちであった。天気の良い時は、現地で刈った草を広げて刈り干しもした。天気の良い日は、2日置くこともあった。夏の刈り干しは、一日干すとかなり軽くなった。そのような作業はどこの家でもしていて、刈り取った草は、縄あるいは切り取ったクズの茎で束にして車力（荷車）を牛に引かせて持ち帰った。

草原の草刈りの大きな目的は牛馬の飼育のためであったが、このあたりでは馬よりも牛を飼っている家が多かった。私の家では、祖父が牛の繁殖にも関わっていたため、種付け用の雄牛も飼っていた。その他に肥育牛（太らせて肉となる牛）として飼い、農耕用にも使っていた牛が2頭、多い時は3頭も4頭もいた。私の家に牛がいたのは昭和30年代初期頃までで、近所も昭和30年代から40年代前半の頃までだった。その頃から牛や馬の代わりに耕運機が使われるようになった。牛を農耕に使わず、肥育牛だけに変わったのは昭和40年代の中頃だった。牛を飼わない家がだんだんと増え、草原もしだいに減っていった。草刈り場であった共有地が個人に分けられ、そこにスギやクヌギが植えられるなどして森林になったところもある。

私の家が所有していた秋吉台のドリーネ畑は、昭和30年頃まで使っていた。そこでは、ゴボウやサトイモやアズキやソバなど、あまり手がかからないものを作っていた。ダイコンはこまめに虫取りをする必要があることもあり、そのようなものは植えなかった。ドリーネの作物は、ふつう自家用であった。私の家のドリーネ畑の面積は、3畝か4畝くらいだったが、ドリーネ畑で広いところは2反（20アール）以上のものもあった。ほとんどのドリーネには所有者があり、耕作されて作物が作られていた。ドリーネでは、化学肥料も使われていたが、周辺の草を刈って積んでおけば堆肥になり、草は大事だった（写真17）。ドリーネ耕作は人力でやらなければいけなかったため、高度経済成長期の頃になると、そこでの作業は全く採算に合うものではなくなってゆき、ドリーネはどんどん放置されていった（写真18）。



写真16 前田時博氏

中央：平成27（2015）年11月28日、秋吉台科学博物館にて



写真17 秋吉台のドリーネを写した昭和初期の絵葉書
写真の裏(葉書の表)には昭和11年10月31日の
日付が入ったスタンプが押してある



写真18 森林化が進む秋吉台のドリーネ
平成26(2014)年11月4日

表4 前田時博氏への聞き取りによるかつての秋吉台の植生景観に関わる主な事項

秋吉台での草刈り	<ul style="list-style-type: none"> 私の家は兼業農家で、父は海軍に行っていたが、爺さんはずっと百姓をしていた。国が戦争に負けた後、父は無事に帰ってきて、兼業で農業もしていた。私は連れられて、草を刈りに明現原(みょうげんばら)のあたり、あるいは少し近くのナガジャクリの辺に行っていた。誰もが牛に車力を引かせて草刈りに行っていた。草は良いところがあれば早い者勝ち。当時は自動車はなく、遠くには行けなかった。刈り取った草は、縄あるいは切り取ったクズの茎で束にして持ち帰った。 周囲一尋(ひとひろ)の草の束を7、8把から10把くらい、長さ4mほどの荷車に2段、時には3段に乗せ、牛に引かせた。道は今のようには舗装されてなく、砂利道だった。長い下り道では牛を後ろにつないでブレーキにした。私と父と爺さんが居た時には、二人が荷車の前で棒を持ち、一人は後ろに荷が落ちないように、しっかりしがみついて乗った。砂利道でガタガタとなり、荷が途中で崩れることもあった。山から下ったら、そこでまた牛を前に引かせた。持ち帰った草は、天気良ければ、庭に広げた。また、生で牛に食わせたものもある。 私は小学生の頃から田んぼの周りの畔草くらいは刈っていたが、秋吉台に草刈りに行くようになったのは中学生になってからだった。秋吉台での草刈りは、畔草刈りとはだいぶ感じが違い、ササが多く固いので力がいった。そのササも秋にはより固くなる。だから夏の前半からせいぜい8月頃に刈るのがよかった。今は機械で刈るので、いつでも刈ることはできる。 高校の夏休みの時期には、朝の3時頃からたたき起こされて草刈りに行っていた。夏草が伸びてちょうど良い頃だった。草には露が付いていたが、露がある方が鎌はよく切れた。草が乾燥したらダメ。また、日が昇ってくると暑くなるので、必ず朝。そういう生活の知恵だった。草刈り場で、夜が白々と明けると、雲海が広く見えて綺麗だった。家に帰ったのは8時か8時半で、その間飲まず食わず。そのため、朝仕事終えて帰って8時半から9時前になって食べるご飯は、腹はすいていておいしかった。私には10歳下の弟がいるが、父が戦争から帰ってから生まれたので、弟にはそういう経験はない。 草刈りに一人で行くことはなかった。爺さん、婆さん、父母の誰かと一緒に、一人だけということはない。刈るだけなら一人でもよかったが、荷にしたり持って帰ったりするのに一人でない方がよかった。 今日は天気が良く大丈夫だという時は、現地で刈り干しもした。刈った草を広げておく。また明日も天気がいいという日は、2日置くこともあった。しかし、どうも天気が悪いというときは、その日の内に取りに行った。それでも、夏なので一日干したらかなり軽くなってよかった。また、乾燥した草の臭いは、なんとも言えずよかった。 こういう事をやっていたのは、うちだけではなかった。馬を飼っている人は馬を使った。牛でもそうだが、荷車を使わないときには、一鞍(ひとくら)といって、鞍を使って馬や牛の背の左右に1把ずつ草の束を乗せて運んだりもした。ただ、草は沢山必要だったので、車力(荷車)を使うことが多かった。車力は今の時代劇によく出るような、車輪が大きいものではない。大きいと道が悪くて壊れるため、また牛が引きにくいから、輪は小さくて頑丈なものだった。車輪の周りや軸のところは鉄製で、ほかは木製。 草はなんでもいから刈って使ったというのではなく、刈る草を選んだ。ハギもとってよいが、それには木の部分がある。そのため、できるだけネザサやチガヤの多いところを選んだ。ススキは、まだほとんどの家が茅葺だったので、残しておいてその茅葺用にした。これも早い者勝ちで、いい所に行って、刈って束ねて、そこに置いておいた。置いておくとも軽くなるので、すぐには持ち帰らなかった。特定の茅場があったかどうかは定かではないが、ネザサが少なく茅の多いところはあった。集落の周辺に茅場はなかった。 隣の集落と、草地をめぐる争いというのは聞いたことがない。草刈りに行ってみたら刈られているということもよくあり、早いもの勝ち。ただ、ドリーネのめぐり(すり鉢状の地形の斜面部分)は刈らなかった。ドリーネの底は私有地で、めぐりは私有地ではなかったが、不文律でドリーネの底の所有者がその部分は使っていた。ドリーネのめぐりより上の部分は、全くの共有地。草刈りには、そんなに遠くには行かなかった。遊びには、秋吉台の北の帰水のあたりまで歩いて行ったこともあるが、遠くに行ったら道中に時間がかかる。 草原の草を刈る時は、少し柄が長く、刃も大きい鎌を使っていた。ただ、木の枝を刈ったりするような柄が長いものではなく、普通の鎌よりも少し刃も大きく柄も長いもの。それは効率よかった。刃の長さは40cmくらいあった。柄の長さは野球のバットよりも少し短い。鎌の刃は、繰り返し磨いで細くなるまで使った。 戦後、昭和の20年代の頃だったか、県の草刈りの大会が明現原のあたりで毎年行われた時期があった。かなり広い地域から人が集まった。明現原のあたりは、行きやすく、草が刈りやすく、また石があまりなく、その大会に適していた。男性の部、女性の部、混合の部などがあった。草を刈る面積を決めて、刈り跡の状況とか、刈った量とか、束ねた状態とかで順位が決まった。私の母が近所の方とのペアで、それに出て優勝したこともあった。 今は本来的には採草権がない畜産農家の人たちが秋吉台の草を刈っている。採草権は、本来は単に近くに住んでいるということだけではなく、山焼きをしたり、昔から草を刈ったりしているということも重要だった。今は、そのようなことはあまり言われなくなってきている。
----------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>牛馬の飼育について</p>	<ul style="list-style-type: none"> このあたりでは馬よりも牛を飼っている家が多かった。馬の方が足も長く、仕事は早い、牛の方が力は強いかもしれない。ただ、牛は角があって、それがちょっと怖かった。馬を飼っていた人もいたが、馬を飼う人の多くは馬車を持っていて、運搬業もしていた。運搬には馬の方が牛よりもスピードが速く適している。その馬で、農耕もやっていた。馬を飼っている家は馬だけ飼っていて、馬と牛の両方を飼っている家はなかった。 運搬の目的はなく農耕用に馬を飼っている家もあった。農耕をするのも、馬の方が作業が早いので、馬を使っていた人もあった。農地が多い人は、牛はゆっくりで効率が悪いので、馬を使う傾向があったように思う。 私の家では、爺さんが牛の繁殖にも関わっていて、コッテイと言っていた種付け用の雄牛も飼っていた。その他に農耕にも使っていた牛が2頭、多い時は3頭も4頭もいた。私の爺さんが元気だった時、私が小、中学生の頃までは、牛に子を産ませる生産牛(子を産ませる牛)を育てていた。牛が子を産むときは、すく体力を使うので、産んだ後には炊いたおかゆを食べさせていた。生まれた子がどんどん育ってゆくのは、見ていてうれしかった。良い牛にするために、良いものを食べさせ、牛はよく肥えていた。運動もさせないといけなかったので、夕方になったら爺さんが牛を散歩させたり、水飲みに連れて行ったりもしていた。しかし、大きく育った牛を売り出すときには、牛がいやがって小屋から出ようとせず、引き取りに来た車に乗ろうとしなかった。とくに肥育牛(太らせて肉となる牛)の場合は、牛もどうなるのか分かるのか、牛舎から出ようとせず、かわいそうになった。そんなこともあり、肥育牛を育てるのはやめることになった。 私の家に牛がいたのは昭和30年代の頃まで。私が高校を卒業した昭和32年にはまだいた。近所も、昭和30年代から40年代前半の頃までだった。この頃から牛や馬の代わりに耕運機が使われるようになった。牛を農耕に使わず、肥やして肉にする肥育牛だけに変わってしまったのが、昭和40年代の中頃だった。農耕用に飼育していた最後の牛は、農耕用には使うことがなくなり、肥育牛になった。牛を飼わない家がだんだんと増えてゆき、草原もしだいに減っていった。
<p>ドリーネ耕作について</p>	<ul style="list-style-type: none"> 秋吉台のドリーネの畑は昭和30年頃まで使っていた。そこでは、ゴボウやサトイモやアズキやソバなど、あまり手がかからないものを作っていた。ダイコンはこまめに虫取りをする必要があることもあり、そのようなものは植えなかった。どこも、ゴボウやソバやアズキが多かった。それらは、種まき後に放っておいて、秋に収穫することができる。 ゴボウは今ではユンボで掘ることもよくあるが、かつてはすべて手掘りだった。掘ったゴボウはふつうよそに売ることではなく、ゴボウを作っていない人に掘ってくださいと言われれば分ける程度だった。ただ、私を知る吉尾さんという家では、そこのお父さんがたいへん熱心で、少しでも生活の糧にということで、ドリーネで作ったゴボウを秋吉台の店に出していた。 私の家のドリーネ畑の面積は、あまり広くなく3畝か4畝くらいだった。ドリーネ畑で広いところは2反(20アール)以上のものもあった。ほとんどのドリーネには所有者があり、耕作されて作物が作られていた。遠いところのドリーネは、行くのがたいへんだった。しかし、秋吉台周辺には多くの集落があり、それぞれのドリーネは比較的近いところに所有者がいた。 ドリーネでは、化学肥料も使われていたが、周辺の草を刈って積んでおけば堆肥になり、草は大事だった。金肥が使われる前は、その周辺の草だけで十分、あるいは十分ではないにしても、なんとか作物ができていた。 ドリーネ耕作は人力でやらなければいけないので、全く採算に合うものではなくっていった。高度経済成長で、それよりも日雇いや、なんらかの他の仕事で働いて儲けた方がいいということになっていった。たいへんな思いをして、ドリーネまで行って農作業をしても、あまり稼ぎなどにもならなかった。そのため、ドリーネはどんどん放置されていった。今でもドリーネ耕作がされているところは、トラクターが行けるようなところだけだ。 ドリーネ畑は、もとは誰のでもなかった。ただ、絵図の記載などから江戸時代には畑になっていたと思われるが、町史を見ても、いつ頃私有化されていったかは書かれていない。
<p>草原面積の減少</p>	<ul style="list-style-type: none"> 私が子供の頃は草原がもっと広がった。草を刈ることもなくなってきたということで共有地を個々人に分けて森林になったところがある。私の家も、今家族旅行村になっているところの近くに、そうして所有していた山があった。それは元は入会山で草刈り場だった。家族旅行村ができるときに、それを売った。山を分けた年代は、町史にも記されていない。草原に県が造林しているところもある。 ナガジャクリの南方など、今はスギが植えてあったりクスギが植えてあったりするところがあるが、そのあたりも昔は全部焼いていたところ。クスギもずいぶん増えた。
<p>山菜類</p>	<ul style="list-style-type: none"> 春はワラビを採りに行った。また、今はあまり見られないが、秋にはアカナバという美味しいキノコがどこにもあった。ハギの根っこあたりにもたくさんあった。 一方、雑木林にはチャナバやツルンコナバとかというキノコがあったが、最近は少なくなった。ツルンコナバはぬるぬるしているキノコで、やはり美味しかった。また、マツタケにはハツタケが結構たくさん出ている。マツタケは、この秋吉台周辺にはなかった。近くの非石灰岩のところでは、マツタケが出るところもあった。
<p>石灰岩の利用</p>	<ul style="list-style-type: none"> 秋吉台の周辺では石灰岩を掘っていたところもあり、結構大規模に掘っていたところもあった。石灰を焼いた窯もあちこちにあった。私たちがその石灰を田んぼに入れたりして使っていた。石灰は、石灰石を割って木炭や石炭で焼いて作る。焼いて粉になるわけではないが、石灰石の成分が変わり生石灰になる。それを水につけると熱が出る。田んぼには、砕いて小さくしたのを撒いて使った。生石灰は水に触れると反応して熱が出るため、小屋などに保存している時には、火事にならないよう雨などで濡れないようにしていた。今も石灰を作っているところもあるが、原石は現在、石灰石を掘りセメントを生産している旧美祿市の会社から買っている。また、大理石を掘り出していたところもあり、その跡も今もあちこちに残っている。
<p>水について</p>	<ul style="list-style-type: none"> 湧水もあちこちにあった。昭和30年代前半までは秋吉台には建物はなく、水は綺麗だったので、飲料水としての利用も含め、生活用水として使われていた。その水には石灰分は多いが、味は良かった。私の自宅の井戸は、今でも使っているが、その水は非石灰岩のところなので石灰分は全くない。石灰分の多い水のところでは、瞬間湯沸かし器が5～6年ほどしか持たないこともあり、持ってもせいぜい10年ほどだが、私のところのものは14～15年経ってもまだ大丈夫だった。
<p>軍事演習場</p>	<ul style="list-style-type: none"> 秋吉台は軍事演習場として使われていて、演習がある時は事前に知らされて立ち入りが禁止された。実弾が飛び危ないので、秋吉台全体入れなかった。戦後は米軍が接収してしまい、戦後もすぐに演習が始まった。それも演習がある時は事前に知らされて、その時だけ入らないようにされ、実弾射撃をしていた。大きな砲弾を撃つので、そのときは地震のような地響きがしていた。今でも、その時に使った薬莖や小銃の玉を見つけることがある。
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> 秋吉台には細かな地名もあるが、秋吉台を広く指す場合には「台山」とひとくりに呼んでいた。「草刈りに台山に行く」と言うように使っていた。明原原とかナガジャクリとかというような地名は、細かく言うときには使ったが、あまり使わなかった。 随徳の集落は火道切りをしている。火道を切るところは火入れもする。火入れの当日は、9時半のサイレンで火道を切ったところから一斉に火を入れて、燃えるところまで燃やす。 昔は焚き物が木だったので、山に行くと枝木を取った。あるいは、松葉なども焚きつけになるので掻いて集めた。そのようなことをしていたので、山は綺麗にされていた。私の家も何箇所か林を持っていた。 高度経済成長期、カルストロードが開通したり、新幹線が開通したりして、このあたりでは秋芳洞や秋吉台への観光客が増え、昔は2軒しかなかった店がどんどんできた。店ができれば、売り子などの仕事が増え、この周りの人の収入が増えた。

高度経済成長期には、カルストロードが開通したり、新幹線が開通したりして、このあたりでは秋芳洞や秋吉台への観光客が増え、昔は2軒しかなかった店がどんどんできて仕事が増え、この周りの人の収入が増えた。

なお、秋吉台はかつて軍事演習場として使われていて、演習がある時は事前に知らされて立ち入りが禁止された。実弾が飛び危ないので、秋吉台全体入れなかった。戦後は米軍が接收してしまい、戦後もすぐに演習が始まった。演習がある時は事前に知らされて、その時だけ入らないようにされ、実弾射撃をしていた。大きな砲弾を撃つので、そのときは地震のような地響きがしていた。

ii) 末永忠雄氏への聞き取りから

表5は、平成27(2015)年11月30日に末永忠雄氏(写真19)よりご自宅でお聞きした内容を、秋吉台の草原に関わる事項ごとにまとめたものである。秋吉台の西側集落(青景)で長く暮らしてこられた同氏からは、前記の前田氏とは異なる話題についても多く聞くことができた。以下はその概要である。



写真19 末永忠雄氏

平成27(2015)年11月30日、ご自宅にて

山焼きは、秋吉台の草原を維持するための重要な作業である。その山焼きは、今も部落で行⁽⁶²⁾い、山焼きの事前作業である火道切り⁽⁶³⁾も部落として参加している。山焼き関係の作業には、昔は24軒で参加していたが、今は17軒で参加し、7軒は空き家。参加者は、高齢化が進み、70代の人でも3人くらいいる。山焼き関係の作業には、1軒から1人、全部で17人が出ている。

昔は草原がもっと広く、かつての草原の端にあった火道が今は150mくらい前に出ている。昭和20年代の頃などは、草刈りをよくしていたので、草丈は長くても50cmくらいだった。昔はみんな草を刈って、刈るところがないくらいだったので、火はあまり大きく燃えなかった。それでも、地面が割とよく乾いていて、ちよろちよろというような燃え方ではなく、割とよく燃えていた。しかし、今は草刈りもしなくなったので草が大きくなり、火がついた時は結構火が大きくなる。今、秋吉台との関わりは山焼きだけ。山焼きはたいへんだが、続けないと3年ほどしたら草丈が背よりも高くなるなどして、草原の中に入れなくなり、今の景観はなくなると思う。昔は、山焼きは草刈りのためにやっていたが、今は観光が主な目的となっている。

秋吉台の草は牛馬の飼育にとって重要だった。昭和20年代の頃など、このあたりでは、ほとんどの家で農耕用に牛と馬を一頭ずつ飼っていた。牛は、雄牛を飼っていた家もあったが、ほとんどは雌牛。エサの量などは牛も馬も同じで、同じものを食べさせていた。そのための餌は、秋吉台に草刈り行って確保していた。ササやこのあたりでアブラ草と言っていたチガヤのような草をよく刈っていた。ススキも短い時はいっしょに刈った。盆までは家畜の餌用に山の草を刈っていたが、盆を過ぎると草は固くなるので、田んぼに入れる堆肥にした。家畜用の草は、冬の干し草も含め、全部盆までに刈っていた。草刈りは、9月いっぱいくらいまでしていた。

昭和20年代などに草を刈っていた頃、夏に冬用の干し草を刈るときには、朝4時頃から行って刈っていた。そして、その刈った草は、午前9時頃までに刈ったところに広げた。そうして乾燥させて、午後3時頃からまた上がって取りに行った。その間、暑いので、一度家に降りていた。その草刈りは男の仕事だった。干し草以外にも、持ち帰ってすぐ食べさせる草もあった。草を刈って、乾かして、それを一鞍（ひとくら）、すなわち片方に3把ずつ、全部で6把を馬の背に付けて持って帰った。1把は、1束の干し草の重さで30キロから35キロくらい。刈るのはその倍の60キロくらい刈らないと30キロ取れない。一日6把刈ってきた分は、牛馬一日分の餌としては十分あり、残りは秋以降に使う干し草として貯め、牛馬の飼料とした。盆までに刈って干し草としたものは、稲藁とともに10月から4月頃までの牛馬の飼料となった。

草刈り場の草丈は短く、30～50cmくらい。草は集めて、わら縄かクズの蔓で固く縛って束ねた。5月の終わり頃から盆の頃までは、ほとんど毎日、馬で1回運んだ。草を刈るところがなくなったら、次のところを刈っていた。昔ほとんどの人が草を刈っていて、あの広い山でも、草を刈るところを探して歩くのがたいへんだった。草刈りは、秋吉台のどこの草を刈ってもいいような感じだった。刈った草はササの割合が大きく、6割ほどあった。ほとんどササしか生えていなかった印象がある。ササを選んで刈ったわけではない。ただ、アブラ草があれば、それを主体に刈ってはいたが、そういうところは少なかった。

私の家のドリーネ畑は1反3畝（13アール）くらいの広さで、そこでは昭和20年代の頃、薬物の野菜は作らず、カブ、ダイコン、イモ、ゴボウといった根物の野菜を多く作っていた。また、根菜のほかに、ソバ、アズキも作っていた。ドリーネの畑は低いところにあるので、山焼きの灰が流れ込んだり毎年シタキ⁽⁶⁴⁾を入れたりすることで肥沃だった。シタキなどの草は、ドリーネの斜面のものを使った。ドリーネの斜面は、カヤ場でもあり、シタキを取る場所でもあった。ドリーネではいい作物が取れたが、そこに行くには、登るのがたいへんで1時間ほどかかった。ドリーネの畑の作物は主に自家用で、余った物は近所に分けたりしていた。ドリーネ耕作は、昭和27～28年頃まではよくやっていたが、昭和30年代にはほとんどしなくなった。よそのドリーネも、昭和30年代にはやっているところもあったが、40年代に入るとほとんどなくなった。

近年イノシシやシカの被害が多くなってきたが、かつてはドリーネの作物がイノシシなどの被害を受けてたいへんだったということはない。ただ、キジは多く、ソバやアズキなど少し被害にあうこともあった。

秋吉台の草原で食用や薬用に採ったものはナバ（キノコ）、センブリ（写真20～21）、ワラビの他はなかった。アカナバは昔はよく採れて、よく食べた。そのア



写真20 秋吉台の草原に咲くセンブリ
2014年11月3日



写真21 末永忠雄氏宅に長期保存されていたセンブリ

カナバは、今では少なくなっているようだが、センブリもたいへん少なくなっている。また、ワラビも少なくなった。

薪は、近くの自分の個人所有の山の木を自分で伐って確保していた。雑木が多かったが、マツもあった。マツは、昭和42年まではあったが、その後一斉に枯れた。このあたりの雑木山の木はほとんどがカシ。昔から常緑樹が多かった。プロパンガスが入ってきた年は、はっきりと覚えていないが、昭和30年代の後半ではないかと思う。ただ、自宅では、今でも風呂は全部薪で焚いている。

茅葺の家は、このあたりでは昭和40年代頃までであった。私の家でもカヤをドリーネに刈りに行っていた。畑として使わなくなったドリーネは、カヤ場にして使っていた。ドリーネはそれぞれの家が所有していたので、家ごとにドリーネでカヤを確保していた。カヤの運搬には馬や牛が使われた。

表5 末永忠雄氏への聞き取りによるかつての秋吉台の植生景観に関わる主な事項

山 焼 き	<ul style="list-style-type: none"> • 今も山焼きは部落で行っているが、私はもう15年くらい行ってない。若い者に任せている。火道切りもこの部落として参加している。その作業は道具を担いで秋吉台に上がるのもたいへんだが、昭和53年に林道ができて楽になった。 • 山焼き関係の作業には、昔は24軒で参加していたが、今は17軒で参加し、7軒は空き家。参加者は、おそらく49歳のうちの子が一番若くて、高齢の人は70代。72か73歳の方が3人くらいいる。山焼き関係の作業には、1軒から1人、全部で17人が出ている。よその地区では2人、3人出るところもある。 • 火入れのときは、毎年南風が強く、若竹山の方から火が迫ってくることが多い。昔は草原がもっと広く、かつての草原の端にあった火道(防火帯)が今は150mくらい前に出ている。かつての火道は登り斜面だったため、火がこちら側に強く来ることは少なかったが、今は山地の反対側の下り斜面に火道があるため、火が向こうから吹き上げてくるような形になっている。ここ10年ほどは、(危険度が高いこともあり)消防団が来ている。 • 火が自分たちの方に迫ってくる時は、風上に逃げるしか方法はない。場所が一番高い所のため、風向きがよく変わるので、決まった風上の場所はない。それでも、これまで危ない目に遭ったことはない。 • 山焼きの火は、燃えるときは結構燃える。昔、昭和20年代の頃などは、ずーっと草刈りをしていたので、草丈は長くても50cmくらいだった。しかし、今は草刈りもしなくなったので草が大きくなり、火がついた時は結構火が大きくなる。また、所によっては草が湿っていて火がつきにくいという話も聞かすが、青景は秋吉台でも比較的南の方で草が乾きやすいこともあり、火が燃えにくいということはほとんどない。 • 今、秋吉台との関わりは山焼きだけ。山焼きはたいへんだが、続けないと、3年ほどしたら草丈が背よりも高くなるなどして、草原の中に入れなくなり、今の景観はなくなると思う。昔は、山焼きは草刈りのためにやっていたが、今は観光が主な目的となっている。 • そのため、火道切りと山焼きには、お金が出ている。よそでは、そのお金は個人で使っているらしいが、ここの集落ではずっと集落のお金にしていて、それで公会堂を建てたりもしてきた。 • 火をつけるとき、昔は風が強いときには、ちょっとずつ慎重にしていたが、今は消防団がいることもあり、おいやれというような感じでやっている。ただ、今はササが長くなったため、火がつきにくくなった。 • 火をつけるのに、今はトーチのような道具を使って灯油でつけていると思う。昔は、枯れ草の先に火をつけてやっていた。火道切りは、私が山焼きに関わってからはずっとある。 • 火は火道の方からつけていくが、向かい風なら、火はなかなか上がらない。反対の方から火が来る場合は、地形が下りの傾斜なので、火がびっくりするくらい早くまともに来る。今は草を刈らないので、草の量が多く、人間の倍の高さもあるような炎が上がる。結構見ごたえのある情景ではないかと思う。昔はみんな草を刈って、刈るところがないくらいだったので、火はあまり大きく燃えなかった。それでも、地面が割とよく乾いていて、ちよろちよろというような燃え方ではなく、割とよく燃えていた。最近、草の下の方が燃え残っていることも多いが、昔はああいうものはなく、綺麗に焼けていた。
牛 馬 の 飼 育 と 秋 吉 台 で の 草 刈 り	<ul style="list-style-type: none"> • 昭和20年代の頃など、このあたりでは、ほとんどの家で農耕用に牛と馬を1頭ずつくらい飼っていた。牛も馬も両方農耕のために、同じように使っていた。ただ、馬の方が足が速かった。牛と馬は納屋を仕切って、右と左といった感じで2頭飼っていた。 • 牛は、雄牛を飼っていた家もあったが、ほとんどは雌牛。雌牛は、飼っている間には子牛を売ることによって、収入にもなった。子牛は美東町大田に子牛市場があって、そこに連れて行った。車で農協さんが連れて行ってくれた。 • 昔は、山から木材を運搬するのに、このあたりでも3人か4人くらい馬だけを飼って生業としていた人もいた。うちの納屋を昭和42年に建てた時も、木材を馬で出してもらった。馬は、運送用の強い馬。ノルマン系と言うのか、背中や尻の丸くなった感じの北海道産の馬。そうした運送業をしていた人は、馬を1頭だけ飼っている人もいたが、2頭持っている人もいた。 • エサの量などは牛も馬も同じで、同じものを食べさせていた。そのための餌は、秋吉台に草刈り行って確保していた。ササやこのあたりでアブラ草と言っていたチガヤのような草をよく刈っていた。ススキも短い時はいっしょに刈った。アブラ草はチガヤではなく、ススキに似たところもあるがススキでもない。ふつうアブラススキと呼ばれている草かもしれない。 • 盆までは家畜の餌用に山の草を刈っていた。盆を過ぎると、草は固くなるので、田んぼに入れる堆肥にした。家畜用の草は、冬用の干し草も含め、全部盆までに刈っていた。草刈りは、9月いっぱいくらいまでしていた。その後は、草刈りに行きたくても、ほかの仕事で忙しくて行けなかった。

<p>牛馬の飼育と秋吉台での草刈り</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 盆を過ぎてからの牛馬の餌には稲藁も加わった。稲藁のほとんどは飼料にした。今のように田んぼに鋤きこんだりはせず、田んぼには秋吉台から採ってきた固い草を入れた。麦藁は、牛馬の飼料にはせず、(家畜小屋の) 敷物として使っていた。敷物には、稲藁も使った。それらは、やがて厩肥となった。 • 昭和 20 年代などに草を刈っていた頃、夏に冬用の干し草を刈るときには、朝 4 時頃から行って刈っていた。そして、その刈った草は、午前 9 時頃までに刈ったところに広げた。そうして乾燥させて、午後 3 時頃からまた上がって取りに行った。その間、暑いので、一度家に降りていた。その草刈りは男の仕事だった。私は中学 2 年頃から行っていた。4 時頃に起きて、親父は馬に乗って、私は後ろをぼとぼと付いて行っていた。私が朝早く登ったのは、夏休みの間だけで、学校がある時は行かなかった。こういった草刈りは、この辺の馬や牛を持っている人はほとんど同様だった。 • 干し草以外にも、持ち帰ってすぐ食べさせる草もあった。草を刈って、乾かして、それを一鞍(ひとくら)、すなわち片方に 3 把ずつ、全部で 6 把を馬の背に付けて持って帰った。1 把は、1 束の干し草の重さで 30 キロから 35 キロくらい。刈るのはその倍の 60 キロくらい刈らないと 30 キロ採れない。草丈は短く、30～50cm くらい。草は集めて、わら縄か蔓で固く縛って束ねた。蔓はクズの蔓を使った。縄や蔓は、自分の背丈に 30cm くらい足した長さで使った。5 月の終わり頃から盆の頃までは、ほとんど毎日、馬で 1 回運んだ。 • 草を刈る所がなくなったら、次のところを刈っていた。ただ、昔ほとんどの人が草を刈っていた。あの広い山でも、草を刈るところを探して歩くのがたいへんだった。 • 草刈りをする上で、隣の集落との関係は、ほとんど気にしたことはなかった。昔は採草権があるものが山焼きをしていたので、秋吉台のどこの草を刈ってもいいような感じだった。ただ、長者ヶ森の方まで行くことはなかった。隣の地区との争いのようなものは、全くなかった。 • 刈った草はササの割合が大きく、6 割ほどあった。ほとんどササしか生えていなかった印象がある。ササを選んで刈ったわけではない。ただ、アブラ草があれば、それを主体に刈ってはいたが、そういう所は少なく、6 割以上はササだった。特に刈りたくない草はなかった。ハギも若い時は全部一緒に刈りこんでいた。盆を過ぎたら、ハギやササなどは固くなって飼料には適さなくなるので、それを刈って田んぼに入れるシタキにした。シタキには、草の種類を選ばなかった。稲を刈った後にそれを入れて、鋤いて、麦を植えた。 • 一日 6 把刈ってきた分は、牛馬一日分の餌としては十分あり、残りは秋以降に使う干し草として貯め、牛馬の飼料とした。盆までに刈って干し草としたものは、稲藁とともに 10 月から 4 月頃までの牛馬の飼料となった。 • 私が牛馬の代わりに機械を入れたのは、昭和 40 年頃。ただ、それからしばらくは牛を飼っていた。 • 秋吉台に登る道を、県が舗装して整備したのが昭和 53 年。従来のだだったところを舗装して整備してもらった。昭和 50 年代以降は、草刈りは草刈機で行っていたが、草刈機がない時代は鎌で刈っていたので、たいへんだった。
<p>ドリーネ耕作と鳥獣害</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 私の家の田んぼの面積は 1ha くらい、また畑は 15 アールくらい。農地改革で減ったり増えたりすることはなかった。その畑の面積にはドリーネの畑は含まれていない。ドリーネでは、昭和 20 年代の頃は畑も作っていた。そこでは、葉物の野菜は作らなかったが、カブ、ダイコン、イモ、ゴボウといった根物の野菜を作っていた。 • ドリーネの畑は肥沃だった。ドリーネの畑は低い所にあるので、山焼きの灰が流れ込む。また、毎年シタキを入れたり、青草を刈ってイモやゴボウの中に入れて乾燥を防いだりもして、それらが土地を肥やした。シタキなどの草は、ドリーネの斜面のものを使った。ドリーネの斜面は、カヤ場でもあり、シタキを採る場所でもあった。 • ドリーネでの農作業は、種を撒いた後はやや多くなるが、普段は月に 1 回程度。ドリーネではいい作物が採れた。たとえば、大根は真白で、とてもいいものが採れた。そのドリーネに行くには、登るのがたいへんで 1 時間ほどかかった。 • ドリーネ耕作は、昭和 27～28 年頃まではよくやっていたが、昭和 30 年代にはほとんどしなくなった。私が親父と最後に行ったのが、確か昭和 31 年だった。よそのドリーネも、昭和 30 年代にはやっているとところもあったが、40 年代に入るとほとんどなくなった。 • ドリーネの農地面積は、私が若竹山の下の船窪というところで作っていたのが、1 反 3 畝(13 アール) くらい。東西 20m、南北 100m 近くあった。棚岩から 700～800m くらい北へ行ったところで、私は 30 年以上も行ってない。 • ドリーネの畑は、自家用には広すぎるくらいだったが、作物をよそに売ったりすることはなかった。余った物は、近所に分けたりしていた。また、その畑を全部使っていたわけでもなかった。根菜のほかに、ソバ、アズキも作っていた。秋はほとんどがソバだった。香りのいい美味しいソバがとれた。ドリーネの近くには湧き水もあり、飲み水にして馬も飲んでた。 • ドリーネの作物が、イノシシなどの被害を受けてたいへんだったということはなかった。ただ、キジは多く、ソバやアズキなど少し被害にあうこともあった。それにしても、キジは多かった。ソバを刈って小さい山にしていたら、必ずキジが 10 羽から 15 羽くらい飛んで降りてきた。うちの親父はキジの猟もしていた。 • キジは、一時は秋吉台でも全然いなかったが、今はこのあたりでも麦もそばも植えるので、キジやほかの鳥類が増えた。秋吉台では、キジを増やすために猟友会が放鳥していた。今は秋吉台よりこっち(里)の方が多と思う。 • 今は里にイノシシが多くなった。昔は里にイノシシが出るということはなかった。シカも多くなってきた。シカにヒノキの皮など食べられてずいぶん被害を受けていると聞く。今は、このあたりでもシカの声をよく聞くようになったが、昔、今のようにシカが多かったら、ドリーネの畑もうまくできなかったと思う。 • ウサギについては、植林した時には結構被害があったが、ドリーネの畑の方でこれはたいへんだといった被害はなかった。昔はウサギを捕って食べたりもしていた。
<p>山菜類と薬草</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ここは石灰岩地帯なので、マツタケは採れなかった。アカナバは昔はよく採れて、よく食べた。そのアカナバは、今では少なくなっているようだが、センブリもたいへん少なくなっている。また、ワラビも少なくなった。 • 草原で採ったものはナバ(キノコ)、センブリ、ワラビの他はなかった。チャナバは今でも食べるが、最近あまり採れなくなった。また、ハツタケが採れなくなってきた。前は、若いマツの林でたくさん採れた。ただ、ハツタケはわざわざ採りに行くというほどのものではなかった。昔は、ナバ採りに行くといい言ったら、私たちはズルタケ、チャナバやムラサキシメジが中心だった。チャナバは、雑木の古い山に生えやすいように思う。

薪や燃料に関すること	<ul style="list-style-type: none"> 薪は、近くの自分の個人所有の山の木を自分で伐って確保していた。雑木が多かったが、マツもあった。マツは、昭和42年まではあったが、その後一斉に枯れた。秋吉台にも昭和40年頃にマツを植えたが、松食い虫で全部枯れた。うちの納屋は自分の家のマツを伐って、昭和42年に建てた。 このあたりの雑木山の木はほとんどがカシ。シイはない。昔から常緑樹が多かった。シイよりもカシの方が火持ちが良いし火力が強く、燃料としては良い。 常緑広葉樹が育つ地域でも、雑木林の木は冬に落葉してしまうものが主体のところも多いが、このあたりでは葉が良く燃えるので、常緑樹の葉を火種にして使った。カシの葉なども、枝に葉が付いたまま束にして持ち帰り、葉の付いたところを火種にした。ただ、落葉樹の枝の束に比べるとかさばった。 プロパンガスが入ってきた年は、はっきりと覚えてないが、昭和30年代の後半ではないかと思う。ただ、うちの場合はそれで薪がまったくいらなくなったということではなく、今でも風呂は全部薪で焚いている。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 昔は植林というとスギやマツだったが、今はマツは松食い虫でダメ、スギを植えたらシカにやられるというような話がぼつぼつ出てきたこともあり、クヌギが植えられたりもしている。 落ち葉は、昭和36年から40年代前半までタバコを作っていたときには、少し採って使っていたこともあったが、その時以外はそれを採りに行くことはなかった。 養蚕は祖父がやっていた。祖父は昭和19年に亡くなったので、その4～5年くらい前、私が4歳か5歳の頃、なんとか物心ついたころまでやっていて、桑畑が10アールほどあった。この家は昭和52年に建て替えたが、前の家には蚕を飼うところもあった。道具はまだあると思う。 昔は、主に夏から秋に米を作り、冬から春に麦を作っていて、麦の収穫は5月だった。その後田植えで、田んぼの仕事は今より1か月遅かった。遅い人は、6月下旬から7月上旬頃に田植えをしていた。昭和44年頃までは、だいたい6月だった。苗は、結構大きい苗で成苗だった。種籾は4月28日頃種を撒いて、苗代をして、それから6月10日頃からぼつぼつという感じだった。だから、水田に植えるときには、苗は結構大きくなっていった。 菜種は、このあたりではあまり作ってはいなかったが、それでも油屋さんがいて、菜種油を絞っていた。 茅葺の家は、このあたりでは昭和40年代頃まであった。私の家でもカヤを刈りに行っていた。カヤはドリーネに刈りに行っていた。ドリーネは畑ではなくカヤ場にして使っていた。ドリーネは、それぞれの家が所有していたので、家ごとにドリーネでカヤを確保していた。カヤは、家ごとに、独自に採っていた。互いの貸し借りもなかった。 私の家のドリーネは、場所が結構遠くたいへんだった。カヤの運搬には馬や牛が役に立った。私の家では、馬を使っていた。

(3) 秋吉台の植生景観の変遷のまとめ

秋吉台は、前記の八幡高原と異なり、今も草原の景観を広く見ることができるところである。しかし、戦後間もない頃に撮影された空中写真と近年の空中写真を比べてみると、その広い草原も、明らかに減少してきていることが確認できる。また、戦後間もない頃は、近年とは異なり秋吉台の主な草原の周辺にも大小の草原や草原的植生が見られるところが多かったこともわかる。また、近年では秋吉台の草原を取り巻く森林には小さな樹木の森林はわずかしかないのに対し、かつてはさまざまな木々の大きさの森林が多く見られたこと、あるいは秋吉台に数多くあるドリーネの植生が、しだいに森林化するなどして変化してきているところが多いことなどがわかる。

秋吉台の草原も減少傾向であるとはいえ、今でもそこに広い草原が残っている背景には、その地が明治から昭和30年代初期まで、長く軍事演習場となっていたこと、またその地が早くから天然記念物や国定公園などに指定されたことなどによって、観光地化が進んだことがあると考えられる。その草原を維持するために毎年行われる山焼き（野焼き）は、かつては草刈りのための草原を守るためになされていたが、近年では主に観光のために草原を残す目的で行われている。その山焼きは、今も秋吉台周辺の集落の協力で行われているが、その作業への参加者の減少や高齢化などの問題が出てきている。

秋吉台の草原は、かつては周辺の集落で飼われていた牛馬のための飼料や農地の肥料などを採取する場として重要であった。秋吉台での草刈りは、夏場を中心にさかんに行われ、多くの人が草を多量に刈っていたため、草が大きく茂っているところはなく、草丈は長くても50cm程度であったという。草刈りがさかんに行われていた頃、秋吉台の草原の草としてはササの割合が大きく、過半が

ササであったとの証言もある。その草原では、かつてはセンブリやワラビなどもよく採れたが、今ではセンブリはたいへん少なくなり、ワラビも少なくなっている。

一方、秋吉台に数多くあるドリーネの底部は、かつては秋吉台周辺の集落の人たちが畑として使用し、そこではゴボウやサトイモなどの根菜類⁽⁶⁵⁾、またアズキやソバなどの作りやすいものが作られていた。ドリーネの斜面の草は、各ドリーネの畑を所有している家に暗黙の使用権があり、その畑の肥料などとして使われていた。しかし、高度経済成長期の昭和30年代には、そうしたドリーネの利用も大幅に減り、昭和40年代にはほとんどなくなっていった。そのために放置されたドリーネは、山焼きで火が強くなり、近年では森林化するなど植生の変化が見られるところが多くなってきている。

むすび

以上、植生景観の現状が大きく異なる中国山地西部の2つの地域について、高度経済成長期以前から近年にかけて、植生景観がどのように移り変わってきたかを、古い地形図や戦後間もない頃などに撮影された空中写真、また文献類や古老への聞き取りをもとに考えてみた。その結果、2つの地域では、それぞれが置かれた社会経済状況や自然条件の違いにより、植生景観変化のしかたも大きく異なっていたが、一方で共通した変化も見られた。

すなわち、広島県北西部の八幡高原では、かつては森林を上回るほどもあったと考えられる草原は、近年ではスキー場とさほど大きくない自然公園を中心にわずかに残っているのに対し、秋吉台では、ある程度の減少は見られるとはいえ、今も広大な草原が残っている。一方、秋吉台でも広大な草原を取り巻く森林の部分については、八幡高原と同様、かつては小さな木々の森林も多かったものが、近年では大部分が高木の森林となっている。それは、高度経済成長期のいわゆる燃料革命や木材の輸入自由化によって、木々が燃料や木材として使われることが大幅に減少したことによる。

なお、八幡高原で、とくに大幅な草原の減少が見られた時期は、大正初期頃から第二次世界大戦終了間もない頃と考えられる。それは、その地域では、その間に牛馬頭数が大幅に減少したり、また薪炭利用などの目的で草原の樹林化が進んだりしたためである。その地域では、その後も高度経済成長期を契機としたさらなる草原の減少も見られるが、それは大正初期頃から第二次世界大戦終了間もない頃の減少に比べると小さいものであった。

ただし、八幡高原の草原の質は、高度経済成長期以降は、それまでとは大きく異なるものとなった。八幡高原では、高度経済成長期には、畜産振興のために大規模草地改良事業が行なわれ、牧草地が大きく増えた時期さえもあったが、それは畜産のための人工草地であった。また、スキー場の草地も、かつてのススキやササなどの草原の植生とは大きく異なるものである。

それでも、そうした草地も含めて考えれば、八幡高原の場合、高度経済成長期を契機とした草原減少⁽⁶⁶⁾の変化は、先に筆者が検討した岡山県北部の例などと比べると比較的緩やかである。また、その岡山県北部の例では、高度経済成長期を中心にスギやヒノキの人工林が急増したし、全国的にもそうした傾向があったことが毎年発行されている『林業白書』などからもわかるが、八幡高原ではその増加も緩やかであった。その人工林が急増しなかった背景には、1976年の調査で若年労働力

不足があったとされているが、植林の仕事は中年以上でもできることなどから、その地区が積雪がとくに多いところであることなどによる何かほかの要因があったことも考えられる。

一方、秋吉台に今も残る広大な草原も、一見昔と変わらないように見えるが、その質はかなり変わってきていることが、古老からの聞き取りからも確認できる。すなわち、かつて秋吉台の草原は、その周辺の集落の採草地として、さかんに草刈りが行われていたため、そこには大きな草はなく、大きいものでも50cm程度の草丈しかなかったが、近年では観光目的で草原は維持されているものの、草刈りが行われているところはわずかしかなかく、草丈がだいぶ高くなっているところが多い。そうした草原の変化の中で、かつては草原に多くあったセンブリやワラビなどの植物の減少も出てきている。

また、秋吉台に数多くあるドリーネは、かつてその底部が畑として使われ、またその斜面の草は畑の肥料などとして使われていたが、高度経済成長期にそうした利用がなくなり、その後、森林化などの植生変化が見られるところが多くなってきている。山焼きの際には、ドリーネにも火が入るが、そのすり鉢状の地形のために火が強くなりにくいことも、多くのドリーネで森林化などの植生変化が生じている要因と考えられる。

このように、中国山地西部において植生景観が今日大きく異なる2つの地域は、高度経済成長期前から近年にかけての植生変化も大きく異なるところであるが、ともに高度経済成長期を画期とした植生景観の大きな変化が見られるところでもある。その変化には、森林の高さの変化のように一見してわかるものあれば、草原の質の変化のように、少し丁寧に見ないとわかりにくい変化もある。

今回、地元の古老からの聞き取り調査で、秋吉台ではセンブリが近年激減していることを知ることができたが、それはセンブリが薬用植物として重要な草であるためである。センブリのように有用な草ではないが、秋吉台ではオキナグサやムラサキなどのように、数が大きく減少してきている植物がある。⁽⁶⁷⁾⁽⁶⁸⁾ それらの植物も、センブリと同様、草原の質的变化が大きな要因で減少している可能性が高い。また、植物相の変化は、チョウ類などの動物相にも大きな影響を及ぼすものでもある。近年、生態学などで草原の重要性が認識されてきている中、今回の調査結果は、そうした分野の方々の参考にもなるものと思われる。

最後に、本研究は、西中国山地の2つの地域の方々の多大なご協力によりまとめられたものである。八幡高原では、北広島町立「芸北 高原の自然館」の白川勝信氏と河野弥生氏に仲介していただき、古老の河野直氏、後藤齊氏、河野むつえ氏からお話をうかがうことができた。また、秋吉台では、秋吉台科学博物館の太田陽子氏のご紹介で、古老の前田時博氏と末永忠雄氏にお話をうかがうことができた。また、その自然館と博物館の館員の方々には、古老からの聞き取りの際に同席いただき、貴重な助言をいただくなど、たいへんお世話になった。ここにそれらの方々に記して深く謝意を表する次第である。

註

(1)——西川治監修、氷見山幸夫他編『アトラス—日本列島の環境変化』朝倉書店、1995

(2)——迅測図など初期の地形図には、針葉樹林の記号

がなく、針葉樹林関係の記号としてマツ林、スギ林、ヒノキ林の記号が用いられているものがある。また、仮製地形図などのように、森林の樹木の大小を分けて記した

ものもある。しかし、それでも木々の詳しい大小や樹木密度などを地形図から知ることはできない。

(3)——たとえば、近年下記のような本もまとめられているが、そのような例は少ない。

橋本佳延著；東お多福山草原保全・再生研究会編『古写真から紐解く六甲山地東お多福山草原の移り変わり』東お多福山草原保全・再生研究会，2016

(4)——明治期以降，日本では草原が森林化したところが多いが，その経緯などについては，筆者も関わる科研費の下記研究が進行中である。

「“草山”はいつどのようにして里山林となったか—里山の今を理解し管理する視座として」基盤研究(B)：2015年度-2017年度

一方，そのことに関しては，地理学の分野から，近年下記の研究成果も出ている。

米家泰作「草原の“資源化”政策と地域—近代林学と原野の火入れ—」『歴史地理学』58(1)，19-38，2016

(5)——このことに関しては，新聞社の求めに応じて，十数年前に下記の記事を書いたこともある。また，その後同様な内容の記述を含む複数の本も出ているが，近年授業で担当する学生の反応などからも，その後も状況は大きく変化していないように思われる。

小椋純一「ここが変…文化の常識2 実は増え続ける“森林”」2001年1月26日朝日新聞夕刊(大阪本社版)

(6)——小林茂「太宰府市の土地利用変化と景観」『太宰府市史 通史編I』193-222，2005には比較的詳しく植生景観の変遷についても記されているが，そのような例は少ない。

(7)——小椋純一『森と草原の歴史』古今書院，2012など。

(8)——小椋純一「高度経済成長期を契機とした植生景観の変化について」『国立歴史民俗博物館研究報告』(171)，223-261，2011

(9)——広島県山県郡芸北町編『八幡村史』広島県山県郡芸北町，1976

(10)——同上

(11)——鈴政信市編『樽床誌』樽床誌編集委員会，1970

(12)——渡邊園子，和田秀次，大竹邦暁ほか「芸北町八幡高原の植生」『高原の自然史』(8)，1-14，2003

(13)——中静透，井崎淳平，松井淳ほか「「あがりこ」ブナ林の成因について」『日本林学会誌』82(2)，171-178，2000

(14)——広島県山県郡芸北町編『八幡村史』広島県山県郡芸北町，1976

(15)——このほかに「準施業制限地」が3.5町歩ある。

(16)——堀川芳雄，佐々木好之「芸北地方(三段峡及びその周辺)植生の研究」『三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告』85-108，1959

(17)——堀川芳雄，鈴木兵二，横川広美ほか「八幡高原の植生概観」『三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告』109-120，1959

(18)——高橋春成「西中国ブナ帯山村における土地利用とそれに伴う森林景観の変化—広島県芸北町八幡高原の事例—」，『富山大学教育学部紀要 文科系』(34)，1-14，1986

(19)——上記註(12)

(20)——上記註(17)

(21)——この堀川芳雄らによる調査研究は，米国陸軍空中写真による1/10,000地形図(八幡村その一・その二)をもとにして作製された植物相観図によるものであり，旧八幡村の区域外が一部含まれる一方，旧八幡村の区域内で含まれないところもある。

(22)——一部にクロマツの見られるところもあった。

(23)——「八幡高原の植生概観」(堀川ほか1959)では，“草原あるいは採草地と異なりササの高さははるかに高い”とされている。

(24)——小椋純一「日本の草地面積の変遷」『京都精華大学紀要』(30)，159-172，2006

(25)——上記註(16)

(26)——現在の国土地理院(当時，建設省地理調査所)

(27)——現在の国土地理院(当時，陸地測量部)

(28)——高橋春成「西中国ブナ帯山村における土地利用とそれに伴う森林景観の変化—広島県芸北町八幡高原の事例—」，『富山大学教育学部紀要 文科系』(34)，1-14，1986

(29)——高橋論文の図の凡例では“草原・荒地”と記されている。

(30)——国土地理院保有の地形図の図歴は，下記URLでも確認することができる。

<http://mapps.gsi.go.jp/history.html#ll=35.0033784,132.1650692&z=9&target=t50000>

(2017年4月22日確認)

(31)——日本のほとんどの地域において，草原は人や動物の影響がなく放置されれば，植生の遷移により，やがて森林となる。

(32)——1/50,000地形図の図名「本郷」(後に「三段峡」)が明治28年式図式で，また「木都賀」が明治33年式図式により作成されている。

(33)——国土地理院地図部『5万分の1地形図作成・所

蔵目録』日本地図センター、1997

- (34)——櫻は棕の旧字。
(35)——日本国際地図学会編『日本主要地図集成：明治から現代まで』朝倉書店、1995
(36)——陸地測量部『地形測図法式』陸地測量部、1900
(37)——教育総監部『測図学教程』教育総監部、1900
(38)——新村出編『広辞苑』（第6版）岩波書店、2008
(39)——小椋純一『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版、1992
(40)——柴刈りがなされなくなった現在の日本では、柴地を見ることは難しいが、柴刈りの柴は通常鎌で刈れるほどの小さな木であった。
(41)——矮小な雑木地は、太陽光が地表まで当たりやすく草本類も生育しやすいため、木本類が中心のところでも、ある程度草本植物が含まれることが多かったと考えられる。
(42)——京阪神地方の主要部を測図した仮製地形図、および東海地方などを測図した正式1/20,000地形図。
(43)——大森八四郎編、永島達雄ほか製図「地形図図式変遷表」（「地形図図式の変遷」付表）『地図』2（2）、1964
(44)——上記註（39）
(45)——小椋純一『絵図から読み解く人と景観の歴史』雄山閣出版、1992
(46)——総務省統計局編。平成29年度版のものは、『第66回日本統計年鑑』として日本統計協会から発行されている。
(47)——大迫元雄『本邦原野に関する研究』日本林業技術協会、1937
(48)——堀川芳雄、鈴木兵二、横川広美ほか「八幡高原の植生概観」『三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告』109-120、1959
(49)——上記註（48）
(50)——掛頭山では、今は東側にスキー場としての草原がある。
(51)——河岡武春、木下忠「八幡高原及びその周辺地域の民俗」『三段峡と八幡高原総合学術調査研究報告』465-544、1959
(52)——横川と那須はともに旧八幡村の南方村外の地区

である（現在は安芸太田町の一部）。

- (53)——上記註（9）
(54)——奈良大学文学部地理学教室藤田ゼミナール編『芸北山村の変貌と再編成：広島県山県郡芸北町を中心に』奈良大学文学部地理学教室藤田研究室、1977
(55)——河岡、木下による民俗調査（上記註（51））、その内容は表1に収録）では、山を焼く際には山の上から火がつけられとされている。筆者が2003年に岡山県北部、蒜山高原で体験した山焼きでも、まず山地の上部から点火された。
(56)——平成29（2017）年1月15日確認。
(57)——森林伐が採後されて間もない所など。
(58)——すり鉢状の凹地（窪）で、石灰岩が二酸化炭素などを含んだ水によって溶食されることによってできる。
(59)——秋芳町史編集委員会編『秋芳町史』（改訂版）秋芳町、1991
(60)——美東町史編さん委員会編『美東町史 通史編』美東町、2004
(61)——上記『美東町史 通史編』所収の年表では、台山放牧場の完成は昭和37（1962）年とされているが、同書479ページでは、それが昭和38（1963）年とされている。
(62)——他の地区との合同で行われる。
(63)——火道は防火帯のことで、火道切りは防火帯作りのこと。
(64)——畑の肥料とするために、刈り取って畑に敷きこむ草木のこと。刈敷（かりしき）。
(65)——根菜類のうちダイコンについては、前田氏の家のドリーネ畑では、ダイコンはこまめに虫取りをする必要があることもあり植えなかったということであるが、末永氏の家の場合、カブとともにドリーネ畑の作物の一つとして挙げられた。
(66)——岡山県津山市阿波の例。その地における高度経済成長期を契機とした草原減少については、上記註（8）の小論の中でまとめている。
(67)——事例 No.57 山口県美祢市秋吉台 一環境省 www.env.go.jp/nature/satoyama/satonavi/initiative/kokunai/pdf/619.pdf（2017年4月22日確認）
(68)——阿部弘和（文）、松井茂生（写真）『秋吉台の植物』秋吉台の自然に親しむ会、2001

（京都精華大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2017年1月20日受付、2017年7月31日審査終了）

Vegetation Landscape Changes and Their Backgrounds in the West Chugoku Mountains Region since the Rapid Economic Growth Period as the Turning Point : Cases of Yawata Highland, Northwest Hiroshima Prefecture and Akiyoshidai, Yamaguchi Prefecture

OGURA Jun'ichi

Vegetation landscape changes since the rapid economic growth period and their backgrounds of two areas in the west Chugoku Mountains Region in Japan were studied based on literatures, photos, interviews of elders and old maps. One of the studied area is Yawata Highland which is located in the northwest of Hiroshima Prefecture, the other is Akiyoshidai, a famous limestone area which is located in Yamaguchi Prefecture. Results are as follows.

In the Yawata Highland, grassland is now rarely seen except for a ski resort etc., however before the rapid economic growth period, grassland was commonly seen there as it was used for grazing cattle and horses etc. Most of the grassland transformed into forests, and most trees of forests have become high and much bigger due to the changes in fuels etc. after the rapid economic growth period; big trees were not commonly seen before the period. The grassland was more wider in the area until the Taisho era or the very beginning of the Showa era, which go back some decades; the grassland area was at least nearly equal to that of forests or it might exceed the forest area in those days. One of the backgrounds of the change was the thriving of charcoal making from the end of Taisho period, and another one of the backgrounds was the large decrease of the number of cattle and horses kept in the area; the main uses of the land changed greatly from keeping cattle and horses and gathering grass for fodder and fertilizer to making forests to secure wood for charcoal.

Meanwhile, in Akiyoshidai, grassland is still widely seen. This is because the area is designated as a quasi-national park etc., and it is important to keep the landscape of grassland to maintain the value as a tourist spot. However, the area of grassland in Akiyoshidai has been also decreasing and that of forests has been increasing after the rapid economic growth period, although the speed is rather slow. Moreover, large changes in quality have been observed in the grassland; the plant community has been changed and some species are rare now. Furthermore, forests surrounding the grassland also have been changed greatly; the rate of tree species has been changed greatly and most trees have grown bigger. Such changes are due to the great changes of people's engagement in the grassland and its surrounding forests.

Key words: vegetation landscape changes, rapid economic growth period, west Chugoku Mountains Region, Yawata Highland, Akiyoshidai
